

2 私を育てたあの時代、あの出会い

担任の役割に気付き、教師としての責任を理解した
栃木県立宇都宮高校◎大堀亮太

4 特集

学びに向かう 授業をつくる

——評価を授業改善に生かす

6 学校事例① 富山県立高岡高校

「互見授業」による評価と「添削棚」による生徒把握を通して指導力を向上

10 学校事例② 広島県立尾道北高校

生徒による授業評価と入試問題分析で、学びの意欲を高める授業を実践

14 編集部まとめ 授業評価を「授業の質向上」に活用するために

16 指導変革の軌跡

16 長野県長野高校

2年生後半からの切り替え◎基礎学力の定着と意識の切り替えで2年生秋から受験生に

20 兵庫県・私立日生学園第三高校

基礎学力の定着◎不登校経験者への手厚い学習指導と行事で社会で生き抜く力を養う

24 岡山県立 邑久高校

協同学習◎「学び合い」が生徒の意欲を引き出し授業を活性化させる

28 生きたデータの徹底活用

目標とのギャップを埋める2年生0学期への意識付け

32 未来をつくる大学の研究室

医学を柱とした統合的な戦略で
感染症の脅威に立ち向かう

長崎大 熱帯医学研究所 平山謙二研究室



36 30代教師の「転んでも起きる！」

「進学校の生徒だから」という思い込みを改め、得点力と読解力を育む指導を追究
山形県立酒田東高校◎石山隆雄

38 新課程への助走

義務教育段階からの「学び直し」の課題と実践 — 国語を中心として —

42 大学選択 新たな視点

意欲的な学生を鍛える専門性の高い少人数教育

50 VIEW'S SQUARE



中学時代、私は数学が苦手でした。そんな私に、数

学の魅力を教えてくださったのが、入学した作新学院高校1年次の担任、松久武先生です。

松久先生の方針で、私の学年では毎朝、「早朝トレーニング」と題して数学の問題演習を実施していました。もちろん、数学嫌いの私には気の重い時間でした。2学期のある日、B5ノートを2ページ使って計算し、やっと解答できるような難問が出ました。ところが、松久先生の解説では、わずか2行の数式に整理されていたのです。しかも、使っているのは、私でも知っている公式。まさに衝撃でした。

それ以来、今まで分からなかった問題にも興味が湧きました。ただ、苦手科目の質問を直接するのはまだ気が引けます。そこで私は、松久先生が教室に置いていた質問用紙を利用しました。これは、出来るところまで式を立て、その先の解法を先生に教えてもらおうというものです。その日のうちに返される質問用紙には、「キミが分かっているのはここだよ」と教える

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

担任の役割に気付いた教師としての責任を理解した

栃木県立宇都宮高校 大堀亮太 OBORI RYOTA

一人の教師によって数学の魅力に目覚めた高校生は、数学の教師として母校に戻り、

新任の時から教科指導に熱心に取り組んだ。

しかし、担当科目の指導だけが教師の役割ではない。

生徒の進路実現を目指す担任の役割に気付いた時、

教師の本当の責任を理解した。

栃木県立宇都宮高校の大堀亮太先生が、その気付きを得た日々を振り返る。

ように、いつも詳しく解説されていた。

質問用紙でのやりとりを繰り返すうちに、分からない問題を考えるのが楽しくなりました。

成績も上がり、数学教師を目指すようになったのです。

2000年度、私は数学教師として母校の門をくぐりました。松久先生は教科主任として

数学科をまとめていました。その背中を見て私は、「一人でも多くの生徒に数学の魅力を伝えたい」と更に意気込んだのです。

当時、「早朝トレーニング」は全学年で行われており、私も作問を任せられました。クラスの習熟度によって難易度や出題傾向を変えていても、一問も解けない生徒もいます。そんな生徒

に、私は「うまく教えられなくてごめんな」と謝りました。

松久先生のおかげで数学が出来るようになった私は、生徒が出来ないことは教師である自分の責任だと感じたのです。どうしたら松久先生のように彼らを救うことが出来るだろう



先輩教師の言葉

教科指導以外の教師としての責任に気付かせたかった

作新学院高校教頭

MATSUHISA TAKESHI 松久武



私が大堀先生を担任していた頃、作新学院高校は数

学科を中心にまとまり、生徒の力を伸ばすさまざまな取り組みをしていました。「早朝トレーニング」として問題演習を始めたのも、その一つです。少し背伸びをしてやっと解ける、そんな作問を心掛けていました。

生徒からの質問も多かったため、教室に質問用紙を置き、「これに質問を書いて提出してくれば、解説して返すよ」と伝えました。空き時間で効率よく答えようとして始めたのですが、苦手な生徒にとっては直接質問せずに済むというメリットもあったようです。伸び悩む生徒からの質問も多く、四百枚が1か月でなくなりました。大堀先生は毎日、提出してくれました。

教師として母校に着任した大堀先生は、教科指導に率先して



か。考えた末、私は数学が苦手な生徒に声を掛け、早朝補習を始めました。教室ではなく職員室で、それも中央の最も大きなテーブルを使用しました。「苦手であることを恥じるな。堂々と学ぼう」という思いだったので、次第に希望者も参加するようになり、徐々に出席者数が増え、職員室に入りきらなくなつて場所を教室に替えた時は、教師冥利に尽きる喜びでした。

の成績でも、面談で注意するのは、数学ばかり。他科目の得点が低くても、「その科目の先生の責任だろう」と考えていたのです。

ところが、松久先生は違いました。「この科目は正答率の低い分野が共通している。指導する側に問題があるのは明らかだ。教科担当の先生に指導を見直してほしいと伝えなさい」と言うのです。一瞬、「新米が他教科の指導に口を出すなんて……」



とひるみまし
た。すると先
生は、「担任
と他科目の担
当教師が本気でぶつからなければ、生徒のための進路指導など出来ない！」と続けました。担任は、担当外の科目を含め、受け持ちの生徒のすべてに責任を負っている。松久先生は、生徒が希望する進路を実現させるといふ担任として最も大切な役目を教えてくださったのです。

振り返ってみれば、先生は、模試成績の推移から生徒の伸びしろをどう読み取るか、センター試験の結果から出願大をいかに決定するかなど、進路指導全般にも通じていました。私は、生徒の進路実現のために担任が全責任を負うという教師としての覚悟を学びました。

現在勤務する宇都宮高校は赴任1年目です。全国有数の進学校で教える先輩方の指導力・作問力を目の当たりにすると、それなりに自信のあった教科指導について課題が次々と見えてきました。ただ、数学が苦手な生徒は、宇都宮高校にもいます。私は、彼らの「出来るようになりたい」という思いに応えたい。そして、生徒の志望実現のために、教師として出来ることすべてに尽力したい。それが松久先生に教えていただいた「教師の責任」だと思えますから。

右まつひさ・たけし 数学科。作新学院高校勤務33年目。2010年度より、同校教頭。
左おおほり・りょうた 数学科。初任の作新学院高校に5年間勤務。その後公立高校に転じ、5年間の茂木高校勤務を経て、10年度より宇都宮高校の教壇に立つ。

取り組んでいました。会議ではよく独自の指導案を発表して先輩の先生と議論を白熱させ、負けん気の強かった高校時代の面影を感じたものです。ただ、教科指導に熱心なあまり、担任になつても、数学しか視野に入っていない様子が心配でした。



担任が責任を負うのは、生徒の進路についてです。志望の実現のためには、担当科目以外にも必要な知識は多くあります。生徒一人ひとりの他科目の模試成績状況もその一つです。大堀先生にそのことに気付いてほしいからこそ、他教科担当の先生に指導改善をお願いするよう促したのです。相手は彼よりずっと年上のベテランでした。教師は誰もが生徒を伸ばしたいと考えています。それに、もともと作新学院高校には、学校全体で生徒を見るという精神がある。だから相手の先生も、さつと大堀先生に伝えてくれるだろうと思っていました。実際、その先生は、自分の至らなさを反省し、補講という具体的な行動も起こしてくれましたから。大堀先生が担任としての責任を理解し、さまざまな勉強を始めた時は、頼もしく感じたものです。思えば、私は大堀先生の担任に戻つたような気持ちだったのかもかもしれません。

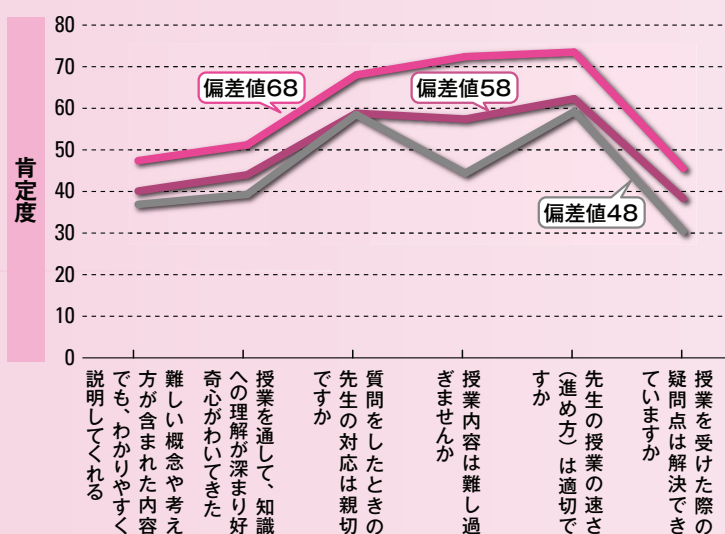
学びに向かう授業をつくる

—— 評価を授業改善に生かす

生徒が主体的に学ぶために、授業をどう改善すれば良いのか。

今号では、教師・生徒による「授業評価」を授業改善につなげる方法を考える。

生徒は授業をどう評価しているか(2年生)



出典 / Benesse教育研究開発センター「学習活動の検証に関わる共同研究」(2008年)などを基に作成

全国の高校2年生への調査結果によると、「授業で疑問点が解決」できない生徒が多い。また、授業の難度やスピードは、学力層によって肯定度に差がある。

1

授業改善に取り組む背景

生徒の実態

- ・教師が細かく指示をしないと学習に向かうことが出来ない (高岡高校)
- ・通塾率が上がり、学校の教科指導の求心力が低下 (尾道北高校)

教師の実態

- ・知識の教え込みが中心で、考えさせる授業になっていない (尾道北高校)
- ・異動サイクルの短期化で、指導ノウハウを校内に蓄積しにくい (高岡高校)
- ・生徒の授業態度が良いと、「指導に問題はない」と安心してしまう (尾道北高校)

授業評価の必要性

- ・生徒の実態を客観的に把握し、共有すること
 - ・他の教師の授業から学ぶ姿勢
- ・生徒と教師の相互作用により、学びに向かう授業をつくる

2

授業評価・学習評価の種類 (評価者と評価対象による分類)

		評価対象 (誰を評価するか)	
		教師	生徒
評価者 (誰が評価するか)	教師	・授業の相互評価、 研究授業による授業評価など ▶ 高岡高校「互見授業」	・定期テスト、実力テストによる学習評価 ・授業中の形成的評価など ▶ 高岡高校「添削プリント」
	生徒	・生徒による授業評価など ▶ 尾道北高校「授業評価」	・授業の振り返り・ ポートフォリオ評価など ▶ 尾道北高校 「授業評価を通じた自己学習評価」

3

授業評価、学習評価のメリット

教師同士による「互見授業」

自分の授業では見えない生徒の様子や他の教師と生徒の関係を客観的に見ることが出来る

生徒による「授業評価」

データ分析・共有により、組織的に授業改善に取り組むことが出来る

「添削プリント」による学習評価

生徒の提出率や解答の状況から、年度ごとの生徒の学力や課題を評価できる

授業評価を通じた生徒の自己評価

生徒の「授業評価力」が高まれば、生徒の授業参画への意識が高まる

「互見授業」による評価と「添削棚」による生徒把握を通して指導力を向上

自分で学習を進められない生徒の増加が課題という富山県立高岡高校は、進路指導部と教務部が連携し、手を掛ける指導と共に、「互見授業」で教師同士で指導を評価し合い、指導力向上に取り組む。

細かく指示しないと生徒は自分で勉強しない

創立112年の伝統を誇る富山県立高岡高校は、例年約200人が国公立大に合格する県内屈指の進学校だ。同校でも、現行課程がスタートした頃から生徒の気質の変化が目立ち始め、従来の指導を見直す必要性を強く感じるようになったと、進路指導部長の城岡朋洋先生は話す。

「生徒の潜在能力は変わっていないのですが、とにかく手を掛けないと学習しなくなりました。教師が細

かく指示をしないと、自分で学習を進められない。本校の授業に対応するだけの基礎学力が備わっていない生徒も多く、これまで通りの指導では十分な学力が付かないと危機感を強めました」

例えば、校内実力テスト実施の際の指導も変化してきたと、教務部長の大浦栄治先生は言う。

「かつては出題範囲となる参考書や問題集のページを伝えるだけで、生徒は自分で対策を進めていました。それが10年程前からは、復習すべき問題を詳細に伝えなければ対策

が出来なくなりました。今では、事前に対策用プリントを渡し、教師がテスト終了後に集めて点検までしています。ここまですると逆に生徒の自律を妨げるのではないかと懸念しつつも、あれこれと手を掛けざるを得ない状況です」

そこで、進路指導部と教務部が連携し、2003年度から新たな指導を次々と取り入れてきた。土曜日には補習を開き、また宿題とは別に週末課題を出し、更に毎日の生活記録を付けさせ、家庭学習の時間を把握して面接で指導した。生徒自ら勉強

しないのなら、勉強せざるを得ない状況をつくろうというわけだ。

生徒の目的意識を高めることも重視し、1、2年生を対象に大学の学部・学科や職業への理解を深める講座、東京大や一橋大などを見学する「大学訪問」も、この時期に始めた。

「進路指導部と教務部の果たす役割は異なりますが、『自ら学ぶ生徒を育てたい』という目標は同じです。互いに課題をぶつけ合いながら、生徒にとって効果の高い取り組みは何かを模索していきました」(城岡先生)

富山県立高岡高校

◎教育目標は、「質実剛健」「自主自律」の精神の育成。2003年度から5年間、文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、理数科教育に力を入れる。11年度に理数科を廃止し、「探究科学科」を設置予定。

設立 1898(明治31)年

形態 全日制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約280人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大2人、東北大8人、東京大17人、名古屋大4人、京都大9人、大阪大26人などに計211人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ410人が合格。

住所 〒933-8520 富山県高岡市中川園町1-1

電話 0766-22-0166

Web Site <http://www.takaoka-h.tym.ed.jp/>

「互見授業」で評価し合い、指導ノウハウの伝承を図る

同校が目指したのは、生徒の意識や行動を変えただけではない。生徒の変化に対応するためには、教師自身も変わる必要がある。生徒の実態を踏まえた授業をしようと、05年度には教務部が中心となり、教師同士が授業を見学し、評価し合う「互見



富山県立高岡高校
城岡朋洋 Shirooka Tomohiro
教職歴23年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。「壁にぶつかった時こそチャンス」



富山県立高岡高校
大浦栄治 Oura Eiji
教職歴28年。同校に赴任して23年目。教務部長。「生徒が分からないことを考え、下位層の底上げを図る」



富山県立高岡高校
北山功臣 Kitayama Koshin
教職歴23年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「まずは教師が元気に授業をすることが大切」



富山県立高岡高校
野村学 Nomura Manabu
教職歴6年。同校に赴任して3年目。地歴科担当。「背中で生徒に伝えられる教師になりたい」

授業」を始めた。

「授業は、生徒と教師の相互作用によって成立します。教師の要求学力を押し付けるだけでも、生徒の要求に応えるだけでも、良い授業とはいえません。良い授業を実践するために、授業を客観的に振り返ることが可能な『互見授業』は、有効な方法と考えました」（城岡先生）

「互見授業」を始めた大きな理由が、もう一つあった。当時、異動サイクルの短期化に伴ってベテラン教

図 「互見授業」に寄せられた教師の感想・意見の例

- ・先生方それぞれに工夫が見られた。自分が授業を組み立てる上で非常に参考になった
- ・内容説明の中に時々、生徒の興味・関心をくすぐる豆知識を入れて、楽しそうな授業だった。見習いたい
- ・生徒への指示が的確であり、生徒の持っている力を十分に引き出していた。是非、私も先生方の指導法を授業に取り入れていきたい
- ・担任しているクラスの他の授業での生徒の様子が分かってよかった

*学校資料を基に、教師の声を抜粋

師の異動が相次ぎ、校内に蓄積された指導ノウハウを早急に若手教師に伝える必要があった。経験豊かな教師の授業をじっくり見られる「互見授業」は、経験の乏しい教師にとって格好の研修の場となった。

「互見授業」の期間は2週間で、教師個々に他教科も含め五つほどの授業を見学する。普段通りの授業を見せ合う方が授業改善に結び付くと考え、特別な準備はせずに授業に臨む。見学した教師は、職員室での立ち話などで感想やアドバイスを授業者に伝えると共に、簡単な感想を書いて教務部に提出する。

「互見授業」の仕組みを形式的なものにしなかったことが取り組みを活性化させるポイントになったと、大浦先生は説明する。

「かつちりとした制度にすると、フォーマルな感想しか出てこない場合があります。敷居を下げ、互いに飾らずに授業を見せ合う雰囲気をつくることで、見たい授業を見て、本音で授業を評価し合えるようになったのだと思います」

09年度までは年1回（6月）だったが、10年度は年2回（6、9月）に増やした。より多くの教師の授業や、別の単元の授業も見学できるようにするためだ。

ベテラン教師と若手教師が互いの授業から学び合う

「互見授業」をどのように授業改善に結び付けているのだろうか。

取材時に、教職歴23年の北山功臣先生による1年生の世界史Aの「互見授業」を見学した。「パクス・ブリタニカの盛衰」の内容で、第一次世界大戦を題材にして、戦争について考えさせるのが狙いだ。特に、大戦への引き金となったサラエボ事件を大きく取り上げ、もし日本で同様の事件が起きたらどうなるのかを生徒にじっくり考えさせる授業だった。北山先生は「教科書の内容だけでなく、多様な考え方を提示し、想像力を働かせて歴史を見る目を育てたい」と、世界史の授業を通して付けた力を説明する。

授業を見学した野村学先生は、次



北山先生による1年生・世界史Aの「互見授業」の様子。生徒に教えているのが北山先生。教室の後ろで見学しているのが野村先生。この日は、澤中幹夫校長も参加した

のように感想を述べた。

「北山先生の知識量と自分の知識量には圧倒的な差があり、もっと勉強しなくてはならないと痛感しました。私は、日頃から生徒の想像力をかき立て、その時代の情景が目に見えるかぶような授業を目指しています。しかし、そうした授業は、豊富な知識が背景にあるからこそ実現できるものです。自分に不足している部分に気付くと共に、目指す授業の方向性を改めて確認できました」

「互見授業」では、ベテラン教師

が若手教師の授業を見ることも多い。以前、野村先生の世界史の授業を見学した北山先生は「野村先生の授業は、例えば話で授業内容を分かりやすくして生徒を引き込み、最後までテンポよく飽きさせずに進めている点が特徴です。私が見習うべきことがたくさんありました」と話す。

このように「互見授業」の良さは、教職歴や年齢にかかわらず、どの教師も学びや気付きを得られるにある。

「授業がうまくいっていないと感じた時、自分の授業だけを振り返ってどれだけ反省しても、見えてこないものがあります。どのように授業を改善すれば良いのか、その解決のヒントを得るために、他の先生の授業を見ることが有効なのだと思えます」（北山先生）

「多くの教師は30代で自分の授業スタイルを確立するものですが、同じ授業を続けるうちに次第にマンネ

リ化していきます。『互見授業』を始めた時に私は45歳でしたが、若い先生方の授業をとっても新鮮に感じました。『自分にも更なる工夫の余地がある』と考え、以前よりも授業への情熱が高まりました」（城岡先生）

他の教師から学ぶだけでなく、自分の授業を見つめ直す機会にもなるため、何げなく実践していた指導が自分の強みであることに気付き、自信を深める教師も多いという。

また、自分が指導する生徒が他の教師の授業を受けている姿を見るとは、生徒の多面的な理解につながるといふ利点もある。

「ベテラン教師ほど授業に慣れてしまえば、生徒の姿が見えなくなりがちです。『互見授業』は、自分の授業では見えない生徒の様子や、他の先生と生徒の関係を客観的に見ることがを通して、生徒理解を深められるという効果もあります」（城岡先生）

教科会と学年会が組織の縦と横をつなぐ

同校の教科担当は、学年をまたいで縦持ちをしていることも特徴の一つだ。そのため、教師全員が参加し

て教科ごとに実施する教科会も、指導改善に重要な役割を果たす。主要な議題は、日々の授業の進捗・難度の調整、各学年の課題と対策などであり、教科全体として指導の系統性を保つために不可欠な場だ。頻度は教科によって異なり、数学は週1回、他教科は月1回程度実施する。

学年の教科担当によるミーティングも頻繁に行う。定期考査や実力テストの作問は、ここで話し合った基準や難易度に沿って進められる。

更に、教科会での内容は、週1回実施する学年会で共有する。「定期考査後は、各教科会で課題や対策について話し合います。その内容を学年会で発表し合うことで、校内ですべての教科の実態を共有し、進路指導などに生かすことが出来ます」（大浦先生）

教科会と学年会が、それぞれ縦と横から学校組織をつなぐ役割を果たし、組織的に指導の改善を推進している。

また、教科会と進路指導部が連携して、入試問題研究にも取り組む。毎年、旧帝大など難関大の入試問題を関連する教科の教師全員で分析

し、傾向と対策を冊子にまとめて校内で共有、分析結果を授業と作問に生かしている。

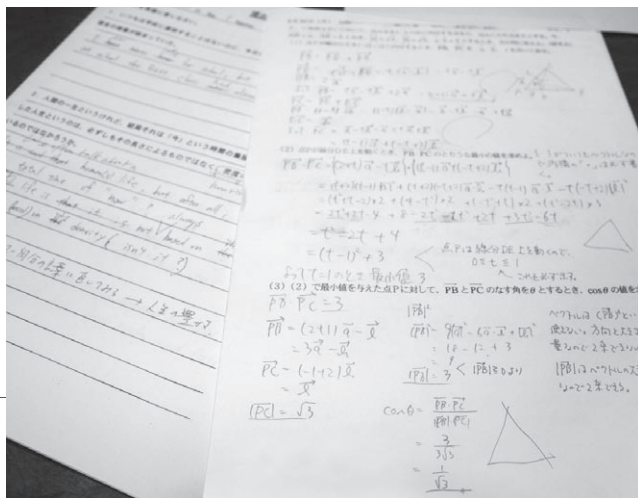
添削プリントで生徒の力を 定観測し、授業に生かす

同校の伝統的な取り組みの「添削棚」は、強力な入試対策であると共に、授業改善にも生かされている。「添削棚」とは各教科の入試対策のプリント指導のことで、国語、数



職員室に設置された添削プリントの配布棚。生徒は自分のペースで希望するレベルの問題に取り組む

学、英語、理科、地歴で実施している。職員室の一角にプリントの配布・返却棚があり、生徒は希望のプリントに取り組んで担当教師に提出する。教師は原則として当日中に添削し、一人ひとりのつまずきに適切な解説を書いて返却用の添削棚に返し、生徒の質問も受け付ける。プリントは、どの教科も難易度別に用意する。例えば、数学は「実力養成」「実力定着(文・理)」の3コー



添削されたプリント。答えだけでなく、丁寧な解説を書き添えて返却する。どの教科の問題も受験対策に直結する内容だ

スあり、いずれも2年生の3学期に始まる。週2〜3枚のペースで棚に置かれ、その総数は入試直前までで200枚近くに上る。学習効果もさげることによって、生徒に自信を付けさせることも狙いの一つだ。「添削をやれば受かる」と多くの卒業生が合格体験記などで伝えることもあり、ほとんどの生徒が取り組み、最後までやり遂げる。入試会場にプリントを束ねたファイルを持参する生徒もいるほどで、自信の源になっていることがうかがえる。教師の負担は大きい

が、3学年団を中心に全員体制で添削に対応している。

「添削棚」はどのように授業改善に生かされるのか。

「問題は、入試の傾向によって多少変えることもあります

が、基本的には毎年同じ内容です。そのため、生徒の提出率や解答の状況から、年度ごとの学力や課題を評価することが出来ます。定観測できるのも、授業の難度や速度の調整にも活用しています」(城岡先生)

このように、他の教師からの評価や生徒の学力実態の把握を通じて、教師個々の指導力向上に取り組む同校。授業改善に向けた教師の意識も変わりつつある。

「狙い通りの良い授業が出来たと実感できるのは、年に1回くらいしかありません。あとは課題ばかりです。だからこそ、教師は常に学ぶ必要がある。そうした意識を共有できるようにになりました。学習を進めるにつれて、生徒はもっと高度なことを知りたいという欲求が強めます。その欲求に応えるためには、教師自身が教科の研究を深めていくことが不可欠です。その意味で、『教育と研究は車の両輪』だと思います。教師が研究を深めるにつれ、授業の質も高まっていくのではないのでしょうか」(城岡先生)

広島県立尾道北高校

生徒による授業評価と 入試問題分析で、学びの 意欲を高める授業を実践

学習意欲の低下が課題であった広島県立尾道北高校では、授業評価によって生徒の学習意欲を探り、授業に反映させている。入試問題分析も行つて基礎学力の重要性を認識させ、意欲を高める授業の実践を目指す。

生徒の授業態度が良くと 教師は安心してしまう

広島県立尾道北高校は県内有数の進学校であり、2010年度入試の国公立大現役合格率は68・6%に上る。1999年度は39・2%と、十年余りで進学実績が大幅に向上した。その契機となったのは、98年度の単独選抜への移行だ。国語、数学、英語では1年次から習熟度別の少人数授業を導入。授業のレベル設定に具体的な大学名を掲げるなどして、生徒の目的意識の向上を図った。

目標に見合った授業を行うため、教師の意識転換も図った。入試問題分析に力を注ぎ、それを基にシラバスを作成。生徒の学力や学習意欲などを把握して、指導を柔軟に改善することに努めてきた。ところが、単独選抜への移行当初は生徒の実態把握に困難を感じる面があったと、松井太教頭は言う。

「当時も今も、本校にはどの授業も真面目に受ける生徒ばかりです。たとえ、本心では意欲がなくても授業態度は良いため、教師は『自分の指導に問題はない』と安心してしま

う面がありました。その結果、模試の成績が予想外に悪く、慌てて対策を迫られる事態がたびたびありました。年を追うごとに、一部の生徒に学習意欲の低下が目立ってきているのも課題でした」

同校は朝や放課後の補習が充実し、「塾に通わなくても志望校に合格できる高校」と地域から評価され、進学実績も着実に伸ばしてきました。しかし、ここ数年は通塾率が少しくずつ上がり、学校の教科指導の求心力が低下しているのではないかと考え、指導改善が急務であるとの共

通理解に至った。教育研究部長の高村聖悟先生は次のように語る。

「今までの授業は、知識を教え込む指導の傾向がやや強く、知識を生かして考えさせる授業にはなっていない。そこで、『量から質へ』をキーワードに、生徒が主体的に考えて意欲的に学ぶ授業への転換を図ろうとしました」

生徒による授業評価で 見えにくい「内面」を探る

同校が授業改善の軸に据えたの

広島県立尾道北高校

◎「至誠一貫」を校是、「自尊・自恃・自制」を校訓とする。1998年度に総合学科に移行した。広島県から、2003年度に「進学指導拠点校」、09年度には難関国公立大進学を目指す「トップリーダーハイスクール」に指定されている。

設立 1925(大正14)年

形態 全日制/総合学科/共学

生徒数 (1学年) 約240人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大2人、京都大5人、大阪大10人、岡山大21人、広島大16人など計173人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大に計76人など、延べ353人が合格。

住所 〒722-0046 広島県尾道市長江 3-7-1

電話 0848-37-6106

Web Site <http://www.onomichikita-h.hiroshima-c.ed.jp/>

は、生徒による授業評価だ。大学入試分析や模試結果分析も行っているが、生徒の学力状況を把握するだけでは不十分であり、生徒の授業に対する構えを把握し、それに適した授業をすべきだと考えたからだ。

授業評価は、年2回、総合学科の原則履修科目と「総合的な学習の時間」を除く全授業で実施する。10年度は、「板書・行動」「学習支援」「目



松井 太 Matsui Futoshi
広島県立尾道北高校教頭
教職歴27年。同校に赴任して1年目。「常に現場にコミットしていきたい」



皆川 佳美 Minakawa Yoshimi
広島県立尾道北高校
教職歴24年。同校に赴任して8年目。総括教科主任。「生徒には多くの人を支え続け、努力を続けてほしい」



重森 佳裕 Shigemori Yoshihiro
広島県立尾道北高校
教職歴21年。同校に赴任して5年目。進路指導部長。「成長なくして成就なし」



高村 聖悟 Takamura Seigo
広島県立尾道北高校
教職歴23年。同校に赴任して3年目。教育研究部長。「誠意をもって貫く」

標理解」など八つの質問項目を設定し、5段階評価とした(図1)。生徒一人当たり10〜13科目を履修しているため、回答数は8000以上となる。項目ごとに集計し、学校全体、各学年、講座ごとの平均値を出し、項目間の相関関係を分析する。

05年度に導入してから3年間は授業者自身がアンケート結果を集約し、どのように授業を変えるかは個々の教師に任されていた。しかし、回を重ねるごとに教師の意識は変化していったという。

「どの教師も生徒の声が授業改善に役立つと実感する一方で、『一人で出来ることには限界がある』という考えを強めました。『板書の評価が平均値より低いから工夫してみよう』といった改善は自分ですぐに出来ませんが、データ分析は独力では困難です。そこで、08年度からは過去に実績のあった授業評価のノウハウを本校に導入し、学校全体でデータを共有して組織的な授業改善に取り組むことに決めました」(高村先生)

図1 授業評価アンケートの質問項目(2010年度)

		A	B	C	D	E
質問1	【板書】《一般科目》板書や資料類は見やすく、かつ整理されていますか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
	【行動】《実技科目》どのような行動をとればいいのか、指示がわかりやすいですか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問2	【学習支援】先生は、授業の中で、「なぜそういえるのか」「どうしてそうなるのか」など、生徒に考えさせるようにしてくれていますか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問3	【ガイダンス】この科目の目的や学習方法について先生から具体的な指示がなされましたか。	十分な指導があった	ある程度の指導があった		あまり指導はなかった	指導はなかった
質問4	【目標理解】この授業の目標や計画、学習内容の意義を十分に理解していますか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問5	【難易度】教材や授業、課題の難易度は、あなたの学力・技能を効果的に伸ばすのに適切ですか。	難しすぎる	やや難しい	ちょうどよい	やや易しい	易しすぎる
質問6	【分量】教材や課題の分量は、あなたの学力・技能を効果的に伸ばすのに適切ですか。	多すぎる	やや多い	ちょうどよい	やや少ない	少なすぎる
質問7	【効果】この授業を受けて学力や技能の向上を実感しましたか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問8	【学習意欲】この授業を受けて、興味関心が深まり、授業・家庭学習・部活動等主体的に取り組むようになりましたか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない

*学校資料を基に編集部で作成

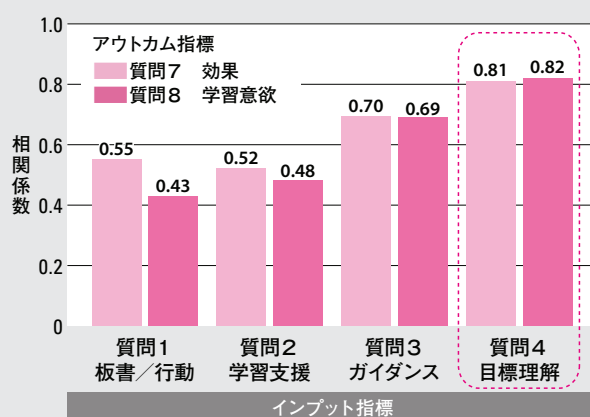
「見通し」を持った学習が 学びの意欲や効果を高める

同校の実践から、授業評価を指導に結び付ける過程を見てみよう。10年度は、5月から6月にかけて校内公開研究授業を行った。教師全員が授業を公開し、他の教師の授業を参観し、指導改善の方法を検討する。

1回目の授業評価は7月に実施。8月下旬に出た結果を踏まえて、教師は担当授業の現状理解（結果の原因推定）、優先課題と改善案を「個人分析シート」に記入する。10月、校長はこのシートを基に教師一人ひとりと話し合い、改善の方向を確認。並行して教科単位での改善策も進める。個人の課題分析に加え、年度当初に教科で設定したテーマに照らした個人の改善案を教科主任に提出し、教科全体で改善を検討する。

個人と教科単位の二方向からの改善案を具体的に授業に反映させる場が、11月の学校を挙げた互見授業だ。授業評価を踏まえ、課題解決の方法を確認し合う。そして、12月に2回目の授業評価を実施。改善案の効果を確認し、次年度の指導に生かす。

図2 インプット指標とアウトカム指標の間の相関関係



質問4・目標理解は、アウトカム指標の質問7・効果、質問8・学習意欲のいずれとも相対的に相関がかなり強い *学校資料を基に編集部で作成

10年度は、質問項目の相関関係に着目し、今後の授業改善に結び付く重要な結果を導き出した。8の質問項目は三つに大別できる。

- ① **インプット指標**—授業での教師の働き掛けの度合い（質問1〜4）
 - ② **アウトカム指標**—働き掛けによる効果、結果の度合い（質問7、8）
 - ③ **負荷指標**—授業における生徒への負担の度合い（質問5、6）
- 「アウトカムはインプットの結果」と仮説を立てて考えて、どのインプット指標がアウトカム指標の結

果を左右しているのか、相関係数を算出した（図2）。すると、インプット指標の質問4「この授業の目標や計画、学習内容の意義を十分に理解していますか」は、アウトカム指標のいずれの項目とも相関が強いことが分かった。つまり、生徒に

が期待できると考えられた。

「この結果は、09年度の分析結果とほぼ同様でした。まずは教師自身が授業の狙いや目標、意義をしっかりと理解させ、生徒が見通しを持って学習できるように促すことの重要性を改めて認識しました。年度当初に科目の目的や学習方法（予習、小テスト、復習、準備、演習）についても具体的に指導することが必要です」（松井教頭）

この結果を踏まえ、現在は学校全体で質問4にかかわる指導に力を入

れている。年度初めに開く科目ガイダンスをそれまで以上に充実させ、必要に応じて単元や授業の冒頭で目標・計画・意義の理解を促す。

授業だけでなく、補習にも工夫を凝らす。例えば、数学の補習ではセクター試験の目標点を基準に希望を取ってクラスを分け、意欲や学習効果の向上を図る。総括教科主任の皆川佳美先生は次のように語る。

「これまでは教師が一方的に教える授業が大半でしたが、生徒が見通しを持って自分で学習を進め、分からない時に教師に質問するような指導に改めました。目標を明示したことで相まって、以前よりも一生懸命に授業に取り組む生徒が増えたと感じています」

授業改善の一環として 全教師で入試問題を分析

授業評価の他に、大学入試分析を授業改善に生かすことにも力を入れている。毎年、全教師が東京大と任意の1大学（担当授業の難易度に相当する大学やセンター試験から選択）の入試問題を分析し、結果を共有する。これは、同校が総合学科へ

の移行時からの取り組みだ。進路指導部長の重森佳裕先生は、東京大の入試分析に教師全員が取り組む意義を次のように説明する。

「東京大の入試問題は、分量が多く、難易度の高い問題もあります。高校で求められる学習内容的に正確に反映されている良問ばかりです。他大学が出題の参考にすることも多いので、東京大だけは全員が分析することになっています」

分析項目は、解答形式や分量、難易度、問題の特徴、指導上の留意点など。分析結果は3年生を対象とした「入試問題セミナー」で使うと共に、日々の授業、定期考査や校内実力テストの問題、補習で用いる教材などに活用する。また、教師が自分で問題を解くことで、生徒にどれくらいの学力が必要かがより具体的に実感でき、進路指導の充実にもつながる。3学年団だけでなく、全学年の教師が取り組むことにも大きな意味があると、松井教頭は強調する。

「受験対策と称してことさらに難問を生徒に解かせようとすることも

あります。しかし、東京大の入試問題分析によって、基礎の大切さを改めて認識できます。1、2年生を指導するうちから東京大などの過去問に取り組むことで、自信を持って、生徒に基礎の重要性を実感させる指導が出来るようになると思います」

個々の教師も、指導にさまざまな工夫を凝らす。

「1年生でも解けそうな難関大の問題を出すと、生徒は目を輝かせて取り組みます。そのような表情を見逃さず、学習意欲の向上に結び付けていく指導こそが大切だと思います」(皆川先生)

このように、同校にとって入試問題分析は、個々の大学の対策というよりも、授業改善の一環としての意味合いが大きい。教師全員が入試問題の傾向を共有し、授業に反映できるため、3年間の指導の一貫性を保つ上でも重要な指針となっている。

自立した学習を支える 生徒の「授業評価力」

授業評価をはじめとした一連の取

り組みにより、授業に対する生徒の意識の向上も期待している。重森先生は、これを「生徒の授業評価力の育成」という言葉で表す。

「教師が授業中に脱線して興味のある話をしてくれたら、それを『面白い授業』と感じる生徒は多いでしょう。しかし、『自分に力が付いたか』という視点に立てば、面白い授業が必ずしも良い授業とは限らないと理解できます。授業評価を通して、生徒がそのような視点で授業を捉えられるようになってほしいと考えています。自分に力が付いたかを判断できれば、『今の自分が何を学ぶべきか』も判断できるようになります。そうした姿勢は自立した学習の支えになるに違いありません」

それでは、「力が付く授業」とはどのような授業なのか。同校の教師は「分かる授業」との違いを意識しながら授業を組み立てていると言う。

「授業評価の質問項目の中では、学習の難易度や分量についても質問しています。『ちよどよい』という回答が多い授業は生徒にとっては

「分かり易い授業」と言えますが、生徒に力が付く授業は生徒が『やや難しい』と少し負荷を感じる授業だと考えています。『難しすぎる』と生徒の意欲は削がれてしまうので、難易度を十分に考慮して授業を進めています」(皆川先生)

生徒が学びへの意欲を高めるためには、学習の目標・計画・意義への理解を促す指導が有効なアプローチになり得ると、授業評価の分析結果から分かった。そうした指導と並行し、個々の教師が自らの力を高める努力を続け、生徒を学びに導くことにも努めたいと、松井教頭は語る。

「教師自身が各教科の『学習者』の一人であるという姿勢を生徒に見せることが必要です。教師が教科の面白さや、今学んでいる内容の先にある世界を見せ、そのベクトルに引っ張っていくことが、教師の教科指導力だと思います」

教師が媒介となり、考えることの楽しさや自分が伸びていく喜びを生徒に実感させる授業を目指し、同校はこれからも実践を重ねていく。

授業評価を「授業の質向上」に活用するために

二つの事例を踏まえ、授業評価を授業の質向上に活用し、学びに向かう授業をつくるためのヒントを、事例と調査データから抽出して紹介する。

評価をいかに授業改善に結び付けるか

互見授業での気付きを組織での授業改善につなげる

二つの事例を通して、生徒が授業に参画するための手段として、授業評価の有効性を確認してきた。

富山県立高岡高校では、教師同士で授業を評価し合い、他の教師の授業も参考にしながら、自身の授業改善につなげていた。小誌2008年12月号で紹介した富山県立富山高校(*)の「互見授業」の記事に対する読者評価が非常に高かったことから、教師同士による授業の相互評価は関心の高い取り組みといえる。一方、形だけの取り組みになり、授業改善や教科指導力の向上に効果

があるのかを疑問視する声もある。

高岡高校では、「教科会」と「学年会」で互見授業での気付きを組織として共有し、授業の進度や難度を調整しながら、「伸ばしたい力」や「力を入れる分野」をどこにするかを話し合っていた。また、添削プリントによる学力把握や入試問題分析による指導力向上にも取り組み、一つひとつを「点」で終わらせず「線」にしている点も特徴だ。

更に充実した互見授業とするための工夫について、小誌08年12月号の読者アンケートの声から紹介する。「互見や観察で得られたものを印象的に整理するだけでなく、観察の事実に基づいた具体的手法の開発に結び付けることで、教師同士の学び

合いは更に深まると思う」(埼玉県)

生徒による授業評価で生徒の自己評価力も養う

広島県立尾道北高校では、生徒による授業評価を実施し、客観的なデータに基づく組織的な授業の改善を行っていた。

今回、小誌で実施した読者アンケートでは、「生徒による授業評価は授業の質向上に必要な」という質問に対して、「とても必要」「まあ必要」という回答が合計で9割以上あった。その理由として次のような意見が寄せられた。

「授業者の思いがそのまま学習者の思いにつながる場合がある。生徒がどう理解したか、感じたか。

生徒の反応に教師は常に敏感であるべきだと思う」(奈良県)

「教師が一方的に伝える、あるいは教師の求めるレベルに生徒を引き上げる授業もあるが、生徒が主体的に取り組み、思考を深める授業は、生徒と教師の共同作業である。その意味で、生徒がどう授業を評価するかは、授業改善への一要素だ」(滋賀県)

一方で、生徒による授業評価を「あまり必要ではない」と回答した理由には、次のような意見があった。「生徒はあくまで教えられる側であり、生徒による授業評価の絶対化はかえって効果を減じるように思う。支持率に一喜一憂する刹那主義に教育が陥る可能性のある諸刃の刃

が、生徒の授業評価には内在しているように思われてならない」（愛知県）

生徒の要求にそのまま応える授業が果たして質の高い授業といえるのか、という指摘だ。

尾道北高校では、「分かりやすい授業」と「力が付く授業」の違いを意識しながら授業を組み立てている。生徒に力が付く授業は「難度が生徒にとって『ちょうど良い』授業ではなく、『やや難しい』授業」と捉えている。生徒が「自分に力が付く授業だ」と自身の学習をモニタリングできる力を持つていけば、たとえ難しい授業でも主体的に参画するようになる。授業評価は、そうした生徒の授業に対する意識を高めるためにも必要だと考えているようだ。

学びに向かう授業をつくるヒント
生徒が授業に主体的に参加できる場面をつくる

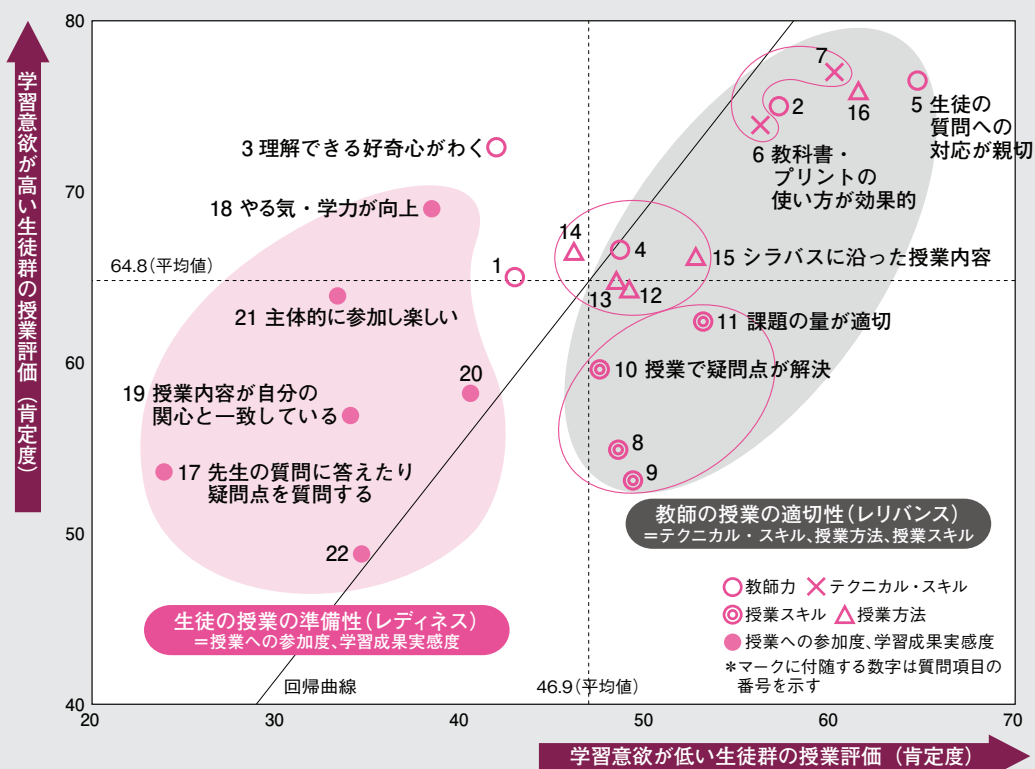
学びに向かう授業をつくるために、どのように授業を改善してい

ば良いのだろうか。弊社で実施した授業評価に関する調査結果を基に考えたい。

図は、学習意欲と授業評価の関係を散布図で示したものだ。縦軸は高い学習意欲を持つ生徒のみを抽出し、その生徒群の授業評価に関する質問項目の肯定度を示した。横軸は学習意欲の低い生徒群の肯定度を示した。例えば、「21主体的に参加し楽しい」の肯定度は、意欲の高い生徒群は63・9、意欲の低い生徒群は33・3である。この数値は、回帰曲線（全体のすう勢値）よりも左側にあり、意欲の高い生徒に多く当てはまる傾向といえる。

全体的に「生徒の授業への参加度や学習成果の実感度」を示す項目は、回帰曲線よりも左側に集中し、一方、教師の授業スキルや授業方法を示す項目は右側に集中している。すなわち、授業で生徒の意欲を引き出すためには、授業の中で、生徒が主体的に参加できる場面などを意識的に用意することが必要だと言えるのではないか。

図 1年生4月時点での学習意欲と授業評価の関係性



出典／ Benesse 教育研究開発センター「学習活動の検証に関わる共同研究」(2010年)より抜粋



◎2010年に創立111周年を迎えた伝統校。「至誠一貫」「質実剛健」「和衷協同」を校訓とし、自己実現と社会貢献が出来る人材の育成を目指す。毎年、多くの生徒が難関国公立大に合格。一方で、吹奏楽や陸上、放送、ECC（英語）などのクラブが全国大会に出場。

設立	1899(明治32)年
形態	全日制・定時制／普通科／共学
生徒数	1学年約290人(1年生は約320人)
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、横浜国立大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに186人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ495人が合格。
住所	〒380-8515 長野県長野市上松1-16-12
電話	026-234-1215
Web Site	http://www.nagano-c.ed.jp/naganohs/

長野県
長野高校

2年生後半からの切り替え

基礎学力の定着と意識の切り替えで2年生秋から受験生に

変革のステップ

背景

◎大学入試に向けた生徒の意識の切り替えが遅く、入試の時期に学力のピークを合わせることが難しかった

STEP 1

実践

◎模試や考査の徹底的な振り返りで基礎学力を定着させ、学部研究や学年通信、面談を効果的に使い受験意識を醸成

STEP 2

成果

◎多くの生徒が2年生後半から受験に向けた意識の切り替えが出来るように。より高い志望を目指す生徒も増加

STEP 3

「中だるみ」を前提として
下位層をつくらない指導をする

長野県長野高校は、旧制中学校の流れをくむ県下有数の進学校で、例年、国公立大に180〜200人、東京大にも10人前後が合格する。部活動も盛んで、全国大会常連の吹奏楽班(同校では部活動を班活動と呼ぶ)をはじめ、野球班や合唱班などの部が全国大会への出場経験を持つ。

多くの生徒が、部活動はもちろん、3年生7月の文化祭まで学校行事に全力投球する。こうした生徒の気質は、良き伝統として学校に活力をもたらしている反面、受験へ向けた学習のスタートを遅くさせている。進路指導主事の松原雄一先生は、それが悩みの種だったと話す。

「班活動や文化祭を一生懸命に取り組む経験が、受験にプラスになることは確かです。しかし、3年生の9月になってから本格的に受験勉強を始めていたのでは、入試本番に学力のピークを合わせることが難しくなります。2年生後半には受験生としてスタートを切れるよう、生徒の意識を早めに切り替えさせる必要を感じていました」

ただし、2年生後半に受験への意識の切り替えが出来たとしても、その時期までに十分な基礎学力が付いていなければ、志望校合格は難しい。同校の取り組みの特徴は、2年生後半だけ

に着目するのではなく、1年生後半から2年生秋までの中だるみの時期に着目し、成績下位層をつくらない指導を徹底した点にある。

「例年、1年生後半から約1年間にわたり、生徒の学習意欲が下がる中だるみの時期が本校で課題となっていました。中だるみを解消できればよいのですが、現実的には難しい。ならば中だるみを前提に、その影響を最小限に抑えようというのが我々の発想です。一時的に学習時間が減っても、基礎学力や学ぼう



長野県長野高校
松原雄一 Matsubara Yuichi
教職歴25年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「当たり前のことを高いレベルでやってみよう」



長野県長野高校
倉島敏明 Kurashima Toshiaki
教職歴29年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「随処に主となれば、立処皆真なり」



長野県長野高校
永井俊彦 Nagai Toshiko
教職歴27年。同校に赴任して6年目。教務部。「Where there's a will, there's a way.」



長野県長野高校
佐藤健二 Sato Kenji
教職歴26年。同校に赴任して6年目。同窓会「人間万事塞翁が馬」

とする意欲があれば、生徒は必ず学習に戻ってきます。1、2年生で成績を低下させない指導を徹底することによって、2年生後半に生徒の意識をスムーズに受験へと切り替えられるのではないかと考えました」（松原先生）

学年通信や個人票を使い 模試や定期考査を徹底的に振り返る

成績下位層をつくらないため、同校が重視したのが模試や定期考査の振り返りである。

模試は振り返りの機会を2回設けている。1回目は、模試受験後に行う自己採点だ。生徒に自己採点をさせる一方、全教科の教師で問題を分析し、解法、今後に向けた学習方法を学年通信に掲載する（P.18図）。更に、希望者を集めて各教科1時間の解説講座を開き、難問を中心に解法の解説、学習の仕方などを指導する。

2回目は、模試結果の返却後だ。個人成績票と答案が返却された時を見計らい、小問ごとの全国平均正答率を示した資料を学年通信に掲載。基礎の定着の重要性を認識させ、確実に得点できるようにさせるのが狙いである。どの問題に正解すれば志望校の合格ラインに届くのかを素点で確認させ、基礎問題での取りこぼしを重点的に復習させる。

また、すべての模試において、前回の模試よりも5ポイント以上偏差値が上がった生徒、下

がった生徒の情報を学年団で共有する。

「成績が上がった生徒に対しては、更に高い目標を目指して頑張れるように励まします。一方、下がった生徒には、教科担当者がその原因を分析し、効果的な学習方法をアドバイスしています。生徒の成績の変化は、学年全体で把握し、対応に当たることが重要だと考えています」（松原先生）

定期考査では、全教科の得点や度数分布、順位の変動を示した個人票を配付する。特徴は、得点や順位の変動に一喜一憂して終わることのないよう、個人票に反省や感想を書く欄を設けていることだ。勝因・敗因を事細かに書き込む生徒もいるが、「駄目だった」の一言で終わらせてしまう生徒もいる。後者の生徒に対しては、面談などを通して、何が問題なのか、今後どうしていきたいのかを問い掛け、具体的な改善策を考えさせている。

また、生徒の反省文の中から、他の生徒の共感を呼びそうなものを、学年通信に掲載している。選ばれるのは前向きなコメントばかりではない。「勉強しているのに出来ない。これが実力なのか」といった煩悶や苦悩が赤裸々に書かれた文章も載せている。

「前向きな文章ばかりを載せても、教師の意図を見透かされるだけです。皆、同じ苦しみを持って頑張っているということを分かっ

「学部学科研究会」で 学びへの意欲を高める

基礎学力の定着を図る一方で、意識の切り替えも並行して行う。2年生の6月と9月に行う「学部学科研究会」では、地元信州大を中心に全国の難関大から大学教員を招き、最先端分野に関する講義を、質疑応答を伴う分科会形式で実施する。生徒は希望分野に応じて受講する。これは、志望校選択に向けて学部学科の理解を深めると共に、学習意欲が下がりやすい夏休み前後に受験への意識を高めるのが狙いだ。進路指導部の倉島敏明先生は、研究会を次のように評価する。

「一方的な講義形式ではないため、大学教員との距離が近く、活発な質疑応答が行われました。中には、『研究生生活は経済的に苦しくありませんか』といった現実的な質問をする生徒もいました。具体的な大学像を描く上で大きな刺激になったようです」

永井先生は研究会実施後、数学に対する生徒の取り組み方が変わったと指摘する。

「数学は、学んでいることが将来どのように役立つのか分かりづらい教科です。最新の研究を通して、ベクトルや微積分が社会でどのように生きるのかを知ることによって、より前向きに授業に取り組めるようになったようです」

同校では、こうした体験がより高い志望を目指すきっかけになることを期待する。

「生徒は高校入学時点であり大学を知りません。そのため、1年生の段階では、3分の1の生徒が信州大を志望校に挙げるのが現状です。地元の大学しか知らない生徒が、他の地域や難関大にも目を向けるようになってほしいと思います」（松原先生）

模試、学年通信、面談で畳みかけ 意識を切り替えさせる

生徒の意識の切り替えを図るに当たり、特に重視する時期は2年生の10月に行う研修旅行明けである。この時期は、模試が初めて5教科で行われることもあり、大学入試に向けた意識を醸成する絶好のチャンスだからだ。

生徒の意識付けを図るため、同校が活用しているのが、前述の学年通信だ。模試直前には5教科模試を受ける意味や心構えを説き、終了後には生徒の志望や成績を集計し、各大学の志望者の人数や判定まですべて公表する。他の生徒がどのような大学を目指しているのかを見せることで、志望校選択へ向けた意識を高めるのが狙いだ。更に、学年全体の学習時間の推移をグラフで示し、「この学習時間で志望を実現できるのか」ということを厳しく問い掛ける。

模試受験後の11月中旬には面談週間も設けて

いる。担任が一人ひとりの志望を確認し、受験に向けた覚悟を持つよう促すのである。

このように、模試や学年通信などの集団指導と、面談による個別指導を連動させることで、多くの生徒が2年生後期の後半を「3年生0学期」としてスタートが切れるようになるという。

「班活動や行事は、3年生の最後までやり遂げさせるのが本校の伝統です。3年生の5月になればインターハイ予選が始まり、7月には最後の文化祭があります。3年生の夏までの間で勉強に打ち込めるのは、2年生後期の後半だけだと伝えていきます。受験生としての自覚も芽生え、研修旅行前とは打って変わって、授業への集中力も高まっていくのを感じます」（倉島先生）

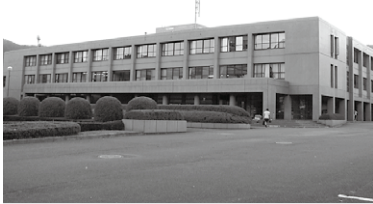
今後は、1年生の早い段階に学年縦断で行う進路行事を増やしていく予定だ。既に、1、2年生合同の東京大学セミナー、1〜3年共通の医学科研究会や大学別研究会などを行った。上級生の姿を見せることで、下級生にも意識付けを図っていく考えだ。

「本校の取り組みは、どれも珍しいものではありません。本校が大切にしているのは、生徒とコミュニケーションを取りながら、活動を一つひとつ丁寧に行うことです。生徒が意識の切り替えのきっかけを見つけられるような指導の在り方を、これからも模索していきたいです」（松原先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年9月号指導変革の軌跡「東京都・私立錦城高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎「太陽のように生きる人を育てん」という教育目標の下、1965年、三重県上野市に日生学園高校（現・第一高校）を設置。80年に第二高校（三重県白山町）、83年に第三高校を設立。第三高校には英国パブリックスクールスタイルの三つの寮を設け、生徒全員が生活を共にし、切磋琢磨する環境を整える。

設立

1983(昭和58)年

形態

全日制／普通科／男子／全寮制

生徒数

1学年約180人

10年度入試合格実績(現浪計)

私立大は、早稲田大、中央大、同志社大、立命館大、関西学院大、関西大、東洋大、龍谷大、京都産業大、近畿大、甲南大、神戸薬科大、大阪経済大などに延べ72人が合格。

住所

〒671-2131
兵庫県姫路市夢前町戸倉566

電話

079-336-3333

Web Site

<http://www.nissei.ac.jp/daisan/>

兵庫県・私立
日生学園第三高校

基礎学力の定着

不登校経験者への 手厚い学習指導と行事で 社会で生き抜く力を養う

変革のステップ

背景

◎20年程前、不登校経験のある生徒の可能性に着目し、積極的な受け入れを開始。社会で生き抜く力を付けさせる活動も始動

実践

◎豊富な行事で自己肯定感の向上と、日々の小テストで基礎学力の定着を図る。手厚い支援で生徒の不安定な心をケア

成果

◎再び不登校になる生徒が10%から2～3%に減少。難関私立大合格者が2桁となり、2年連続で京都大に合格

不登校の生徒の
可能性を引き出す

日生学園第三高校は姫路市北部にある全寮制の私立校だ。小・中学校時代に不登校を経験した生徒が、全校生徒の半数を占める。不登校経験者を積極的に受け入れるようになったのは、20年前、ある生徒との出会いがきっかけだった。その生徒は、中学時代に不登校を経験し、知り合いのいない高校で心機一転やり直すために同校を選び、入学した。感受性が強く、他の生徒が気付かないことに着目し、一つのことをとことん突き詰める性格だった。時に歯止めが利かなくなることもあったが、教師が支援して学習に向かわせたところ、予想以上の伸びを見せ、教師を驚かせたという。進路指導部主任の松本利寿先生は次のように話す。

「感受性が強すぎるあまり体調を崩したり、人前に出られなくなったりして、不登校となる生徒は多くいます。しかし、そうした生徒は、物事に対する洞察力や学習能力に長け、自信が回復さえすれば潜在的な力を大きく伸ばすことができ、自立への道筋をつけることも、学校教育の大切な役割だと考えています」

以来、「学校生活をやり直したい」という生徒を受け入れ、学園全体で約2500人を超える不登校経験者を社会へ送り出してきた。

入学後1か月の指導で 生徒の居場所をつくらせる

同校が不登校経験者を受け入れるに当たり、最も配慮するのは入学後の1か月間である。入学当初は生徒同士のコミュニケーションがほとんどなく、教室は静まり返っている。入学直後にはどの学校でも見られる光景だが、同校の場合、入学オリエンテーションが終わり、教室に帰っても、生徒同士の会話はほとんどない。中には、「家に帰りたい」と泣き出す生徒もいる



日生学園第三高校
松本利寿
Matsumoto Toshinori
教職歴24年。同校に赴任して22年目。進路指導部主任、3学年主任。「手厚い指導により生徒の隠れた個性を発揮していきたい」



日生学園第三高校
吉田元彦
Yoshida Motohiko
教職歴16年。同校に赴任して4年目。教務部主任。「機を見るに敏」



日生学園第三高校
迫畑裕之
Sakohara Hiroyuki
教職歴・赴任歴共に4年目。1学年担任。「出来るまでやる」徹底した指導を心掛けたい



日生学園第三高校
米倉正朝
Yonekura Masaki
教職歴・赴任歴共に1年目。3学年担任。「生徒と一緒に歩いていきたい」

という。1年生担任の迫畑裕之先生は、入学当初の指導の重要性を次のように説明する。

「入学後の1か月で友だちが出来るかどうか、生徒が学校になじめるかどうかの大きな分かれ目となります。人間関係を築けなければ、高校でも不登校に陥ってしまう場合があるからです。そのため、私が最初のLHRでも重視するのは、生徒同士のコミュニケーションが活発化するよう促すことです。生徒同士をペアにしてインタビュースタビュールゲームを行い、趣味や好きなことについて語り合う機会を設け、友だちの輪が少しずつ広がるように配慮しています」

次の関門は、5月の連休明けと夏休み明けだ。生徒の中には、長い休みの間に不登校時代の生活サイクルに戻ってしまい、休みが終わっても学校に足が向かなくなる者もいる。予防のために教師が家庭訪問を行うが、それでも学校に来られなくなった生徒にとって頼りになる存在は、クラスメートや部活動、寮の先輩である。

「生徒は自分自身が不登校を経験しているだけに、友だちや後輩のために何とかしたいという気持ちを持っています。教師が声を掛けるよりも、生徒が声を掛ける方がはるかに効果があります」（松本先生）

友だちと一緒にだからこそ、集団生活の困難さも乗り越えられる。その苦労を一つひとつ乗り越えることで、生徒は徐々に自立へと向かって

いくのである。

人前で表現する体験が 生徒の自信を生む

同校では生徒一人ひとりに活躍の場を与え、自己肯定感を高めることも大切にしている。例えば、文化祭に類する行事は年6回設けている。教務部主任の吉田元彦先生は、その意義を次のように語る。

「スピーチや演劇、クラブの発表、ディベイト、クリスマス会など、どの生徒にも1年間に必ず1回は人前で表現する機会を設けています。最初は人前に出られない生徒もいますが、そうした生徒にはまず裏方の仕事を任せ、次の行事で人前に出る役割を与えています。学校で自分の居場所を見つけることが、何よりも重要です。その後、少しずつ『自分らしさ』を発揮させていくのです」

特徴的なのは、必ず演劇を取り入れている点だ。松本先生は次の点を強調する。

「不登校経験者の中には、自分自身を嫌い、受け入れることを拒む者がいます。彼らにとっては、まず『他者』を演じることが人前で自分を表現するための第一歩になるのです。そして、そうした生徒にとって、一つのこと、一生懸命に打ち込み、他者から認められるという経験こそが何よりも大切なのです」

毎日の小テストで 基礎基本の定着を図る

教科指導では、中学校段階の学習内容が定着していない生徒が多いため、基礎・基本の復習を何よりも重視する。その際にも配慮が必要だと松本先生は語る。

「高校生になって、心機一転を図ろうと考えている生徒に小中学生向けの教材を渡すと、意欲を削ぐことになりかねません。学校に通えなかったことを引け目を感じている生徒が多いだけに、プライドを傷つけないように、高校の学びとつながる形で『学び直し』をさせる必要があるのです」

学び直しの中心となるのは、英語の小テスト「DMTプログラム（*1）」だ。毎日の朝学習で15分間、英単語を中心とした50問に取り組み、担任が即日採点を行い、不合格の生徒は放課後に追試を受ける。1年生では中学校の復習から始まって徐々に高校の内容を増やし、3年生では大学入試を視野に入れた英文法に取り組み。地道な学習の積み重ねにより、生徒の英語の偏差値は3年間で平均15ポイント伸びるという。

国語、数学、英語では、ほぼ毎時間の授業で小テストを行う。2年生以降は理科と地歴も加わる。出題内容は前時の復習が多いが、教科によつては独自のテキストを使い、その中から出題する。

1年生の初期段階では、学習内容の定着もさることながら、自習の習慣付けにも重きを置いている。年度初めに各教科のテスト範囲や回数を提示してもらい、進路指導部と教務部が必要なたテストかどうかを精査する。生徒に過度の負担がかかるのを防ぐと共に、特定の教科に偏った学習にならないようにするためである。

また、生徒の細かい変化を見逃さないため、小テストの成績や、基礎学力と共に力を入れていく読書量をクラスごとに毎日集計するなど、日々の学力の変化を確認して、教師全員で共有している。

頻繁なクラス替えで 生徒の学力の変化に対応

年に複数回のクラス替えを行うのも、同校ならではの取り組みだ。不登校の経験があるために学びが抜け落ちており、入学当初に生徒の学力の変動を予想することが難しい。クラスを1年間固定してしまうと、生徒の急激な学力変化に対応できなくなるからだ。

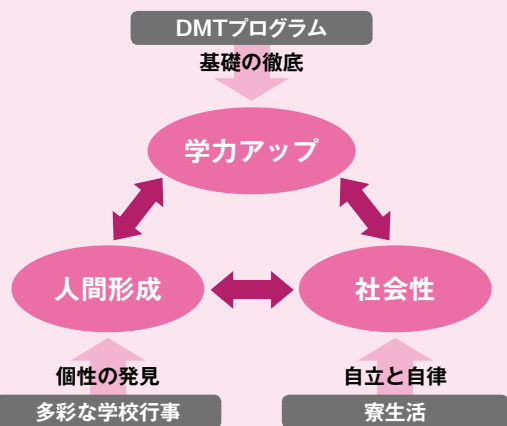
同校は1学年4クラスで、習熟度に応じて、1組（特進クラス）、2・3組（進学クラス）、4組（総合クラス）に分けられる。入学時点では入試の成績でクラス編成をするが、4月末にはスタディサポートの国語の成績により最初のクラス替えを行う。以後、中間考査、期末考査、

模試、その他必要に応じてクラス替えをする。その回数は、年7回以上となる。吉田先生は次のように説明する。

「4月に国語の成績でクラス分けをするのは、国語がすべての教科の土台になることと、他教科に比べて不登校経験が原因となる学力の差が小さいからです。中には、中学校にほとんど通っていないかったために、英語や数学の基礎学力が付いていない生徒もいます。しかし、入学時は低い成績でも、勉強すれば短期間でぐんぐん伸びる生徒もいます。入学時は4組だった生徒が、わずか半年で特進クラスの1組になることもあるのです。刻々と変化する生徒の学力に対応するために、柔軟なクラス編成が欠かせません」

クラス替えといっても、生徒全員を入れ替えるわけではなく、成績に応じて数人単位で移動するだけだ。それでも、入学後の1か月で2割もの生徒のクラスが替わる。2年生では各人の学力がほぼ固定するため、クラス替えの回数は減るが、それでも年2、3回は行うという。

習熟度が伸びず、他クラスへと移動する生徒にはじっくり話をする。「進学や総合のクラスで頑張りたい」「特進クラスでもう少しもがいてみたい」など相談し、納得した上でクラスが替わるため、意欲が下がることもない。伸びしろの大きい生徒たちだけに、教師には生徒の変化に対する柔軟性や即応性が求められる。



*学校資料を基に編集部で作成

寮のチューターが 生徒の悩みを受け止める

手厚い学習指導や多彩な学校行事により、数か月で教室は見違えるように活気を見せる。しかし、生徒が明るい表情を見せるようになってくると、吉田先生は話す。

「成績が順調に伸び、クラスで居場所を見つけて、生き生きと学校生活を送っていたにもかかわらず、少しのきっかけで再び気持ちが悪くなってしまふ生徒もいます。担任や各分掌、各寮の担当教師と密に連絡を取り、生徒の変化を素早く察知するように努めています」

たり、ストレスを感じる生徒が息抜きをしたりする上で欠かせない。同校には三つの寮があり、それぞれ4人の教師がチューターとして配置されている。週2回は寮に泊まり込み、生徒の自学自習を支援したり、相談に乗ったりしている。特に、若手教師は生徒の良き相談相手となる。教職歴1年目の米倉正朗先生もその一人だ。

「一番多いのは人間関係についての相談で、朝の3時まで話を聞くこともあります。相談を受ける際に心掛けているのは、あれこれ助言するのではなく、生徒の話にひたすら耳を傾けることです。話し終えた後の生徒のすっきりした表情や、悩みを乗り越えて学校で元気に活動している姿を見ると、私自身、救われたような気持ちになります」

手厚い支援が必要なのは、生徒だけではない。不登校経験は、生徒だけでなく保護者の心も敏感にさせる。全寮制ということもあり、入学当初は担任が頻繁に保護者へ連絡を取り、生徒の状況をこまめに伝える。特別なことがなくとも、最初の1か月は全生徒の家に現状を報告する。

再不登校率は2%に減少 次なる目標は生徒の進路実現

不登校の受け入れを始めてから20年。当初は、指導のノウハウが蓄積されていないこともあり、再び不登校となる生徒が10%ほどいたとい

う。現在は、教師のきめ細かな支援が実り、不登校に再びなる生徒は2〜3%に減少した。ほとんどの生徒が同校で自信を取り戻し、新たな一歩を踏み出していくのである。生徒たちが成長していく姿ほど教師に勇気と元気をもたらすものはないと、迫畑先生は強調する。

「入学当初は泣きながら勉強していた生徒が、文化祭や卒業式で雄弁に語っているのを見ると、3年間でこれほど成長するものか」と感動を覚えるとともに、生徒の潜在的な能力の高さに改めて驚かされます。教師は少し背中を押しただけ。不登校という本人にとって辛い経験を乗り越え社会のリーダーに活躍してほしいと願い、送り出しています」

大学進学率は大きく向上した。以前は関関同立(*2)の合格者はゼロだったが、ここ5、6年は30人前後が合格。国公立大は2009年度入試では10人以上が合格し、08年度、09年度と2年連続で京都市大に合格者を出した。将来的には関関同立に70人合格が目標だが、「進学実績だけがすべてではない」と松本先生は強調する。

「以前は大学に入っても、居場所や目標を持って中退してしまう卒業生がいました。何より大切なのは、生徒が進学後にミスマッチを起こさず生き生きと大学生活を送ることです。社会で生き抜く力を十分に付けさせて送り出すことが本校の使命であり、そのために教師の指導力を高めたいと思います」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年9月号指導変革の軌跡「埼玉県立上尾鷹の台高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



岡山県立
邑久高校

協同学習

◎岡山県邑久実科高等女学校として開校。2006年度に単位制に移行。10年度に協同学習を導入、県教育庁指導課主管の「高等学校教科指導パワーアップ事業」研究指定校に選ばれた。施設訪問や地域イベントへの参加などボランティア活動にも力を入れる。

設立

1921(大正10)年

形態

全日制・単位制／普通科／共学

生徒数

1学年約160人

10年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、岡山大、長崎大、岡山県立大などに計7人が合格。私立大は、近畿大、神戸学院大、岡山理科大、就実大などに延べ87人が合格。短大には10人、専門学校には60人が合格。

住所

〒701-4221
岡山県瀬戸内市邑久町尾張404

電話

0869-22-0017

Web Site

<http://www.oku.okayama-c.ed.jp/oku.htm>

「学び合い」が 生徒の意欲を引き出し 授業を活性化させる

変革のステップ

背景

◎授業態度は真面目だが、成績が伸びない生徒が多い。他校の取り組みから生徒の協同学習に可能性を見いだす

STEP 1

実践

◎有志の教師で学び合いを実践、他校視察や公開授業を通して浸透させ、2010年度に全校で導入

STEP 2

成果

◎教師の生徒理解が進み、授業に積極的に取り組む生徒が増えた

STEP 3

ただノートを取るだけの生徒に
一斉授業の限界を感じる

2006年度に岡山県立邑久高校に赴任した教務課主任の杉山義則先生は、定期考査を採点しながら違和感を感じていた。生徒は落ち着いて授業を聞き、きちんとノートも取っている。毎回宿題も提出する。しかし、テストの結果はそうした生徒の態度とはかけ離れたものだったからだ。生徒は授業を聞いているように見えるだけで、内容はほとんど頭に入っていないのではないかと。その感触は、定期考査を重ねることに確信に変わっていった。

「生徒の授業態度は真面目で、他校の生徒と変わらないと感じていましたが、授業を聞いていくように、実はうわの空。ノートを取り、宿題は出しても、結局、授業の内容は定着していなかったのです。しかも、そうした生徒は1人や2人ではありませんでした」

08年度に赴任した荒金徹先生も、同じような課題を感じていた。

「本校の生徒は、素直で純朴な半面、受け身で指示待ちタイプ。教師の投げ掛けに対しても、生徒はただノートを取るだけで、学力として身に付いてはいませんでした。自分の授業スタイルに限界を感じ始めていました」
これまでの一斉授業だけでは、生徒の力を伸ばし切るのは難しい。有効な打開策はないか。



荒金 徹 Arakane Torn
岡山県立邑久高校

教職歴18年。同校に赴任して3年目。2学年主任。「生徒には常に『限界突破』を心掛けてほしい」



杉山義則 Sugiyama Yoshinori
岡山県立邑久高校

教職歴26年。同校に赴任して5年目。教務課主任。「教師は学びのコーディネーターであるべき」



姫路真由美 Himeji Mayumi
岡山県立邑久高校

教職歴26年。同校に赴任して6年目。進路指導課主任。「やればよかったと悔やむことのないよう常に挑戦する意欲を持ってほしい」



岡野貴司 Okano Takashi
岡山県立邑久高校校長

教職歴35年。同校に赴任して2年目。「自信と活力を備えた生徒を育成したい」

杉山先生が生徒に合った指導スタイルを模索していた時に目にとまったのが、本誌08年9月号の広島県立安西^{やすし}高校の記事だった。「学び合い」を軸にした授業により、学校再生、生徒の学習意欲の向上を果たした事例である。

08年12月に安西高校で公開授業が実施されたため、杉山先生は同僚2人と訪れた。そこで目にしたのは、授業で生き生きと活動する生徒の姿だった。授業に無関心な生徒は一人もいなかったのだ。

有志の教師で 独自に学び合いを導入

学び合いの効果を実感し、すぐにでも自校で実践したいと考えたものの、報告だけで他の教師の賛同を得るのは難しかった。そこで、3人の教師は、まず自分たちの授業で学び合いを取り入れることから始めた。その一人、進路指導課主任の姫路真由美先生は次のように話す。

「他校の指導例や専門書を参考に、担当科目の現代文で実践してみたところ、すぐに効果を実感できました。いつもなら居眠りをしてがちな5限目の授業でも、生徒は投げ掛けた課題について活発に話し合っていました」

折しも、09年度に赴任した岡野貴司校長の下、教務課、進路指導課、学年主任で構成する「学力向上プロジェクト」が立ち上がった。校内に学び合いを広める契機になると考えた杉山先生たちは、プロジェクトの検討課題の一つに「協同学習」を据え、他の教師と共に先進校の訪問を繰り返した。すると、次第に学校全体に学び合いへの理解が浸透し、09年7月には1年生の全授業で導入が決まった。当時、1学年主任だった荒金先生は次のように振り返る。

「学び合いの趣旨には賛同できるものの、学力が下がったり、進度が落ちたりしないか心配で、最初は導入をためらいました。しかし、同じ数学で既に学び合いを取り入れてい

た杉山先生のクラスと、一斉授業を続けている私のクラスを比べてみると、進度はほとんど変わりませんでした。また、杉山先生の授業の評判を聞いた私のクラスの生徒から『杉山先生の授業でしている学び合いを、先生の授業ではされないのですか』と質問されることもあり、思い切って始めました」

校内向け公開授業で 学び合いの理念や方法を共有

09年11月、杉山先生と姫路先生は学び合いを取り入れた校内公開授業を実施した。

「まずは授業を見て、自分にも出来ると感じてもらえればと考えました。公開授業という、指導案をしっかりと練り、完璧な授業をしようとする先生が多いのですが、それでは敷居を高くするだけです。我々が普段行っている授業を見てもらい、先生方が抵抗感を抱かないよう配慮しました」(杉山先生)

こうした過程を経て、10年度には全校で学び合いを導入することが、12月の職員会議で決まった。県内には一部の授業で取り入れている高校はあったものの、全校で導入したのは同校が初めてだった。決断を下した岡野校長は、その思いを次のように語る。

「今までの勤務校での経験から、一斉授業には限界を感じていました。また、前任校は

SELHiの指定校で、ペアワークやグループワークで成果を上げていました。これらのことから、学力に幅がある中ですべての生徒の力を伸ばすには、生徒が主体的に活動できる場面を多く設ける必要

があると考えていたのです。そうした私の思いと、杉山先生や姫路先生の目指す方向性が一致したことは幸運でした」

上意下達ではなく、現場の教師から取り組みが始まり、校長が支援する形で全校一斉導入されたことが、スムーズな浸透につながったのだ。

形よりも理念を共有し 取り入れ方は個々の教師に任せる

10年4月、「協同学習」の研究を進める中京大の杉江修治教授を講師に招き、理論の概要と授業の進め方について指導を受けた。杉江教授が提唱する学び合い(図1)は、生徒同士が学び合うことで学習への動機付けを図ると共に、生徒のコミュニケーション能力の向上、スムーズな学級運営を目指すものである。

大まかな流れは次の通り。①授業の狙いや課

図1 グループ活動の進め方の工夫

- ①課題(学びのゴール)の明確化
個人、グループ、クラスの課題をそれぞれ設定する
- ②生徒が個別に考える時間をとる
考えるための資料の提供、考えられない生徒の支援
- ③話し合いを促す手順を指示
個人の発表の仕方、グループ内における意見集約の仕方など
- ④グループ内の役割を指定
グループ全員に役割(司会、記録、発表など)を与え、責任を持たせる
- ⑤適切なグループを編成する
人数は4~6人、異質性を持たせるため、基本は男女混成
- ⑥教師が学習集団のイメージを持つ
単なる仲よし集団ではなく、課題解決志向型の集団づくり
- ⑦学び合いを振り返る機会を持つ
自分の変化に仲間がどのように貢献したのかを振り返らせる
- ⑧学びの値打ちを伝える
主体的な学びを体験させ、学習意義を伝える

グループ学習=協同学習ではないが、主体的、自律的な学習場面としてグループ学習を導入する、としている

*中京大杉江教授の資料を基に編集部で作成

題を説明し、②生徒が一人で考える時間をとり、最大の特徴は、授業の方法を固定化していないことだ。数学で演習やテストの振り返りに取り組ませたり、国語で著者の意図を考えさせたりといった場面では、グループで学び合いを行う。しかし、すべての授業で学び合いを行う必要はなく、新しい概念を教える時など、一斉授業が効果的な場合は、1時間、講義に充てられることもある。グループになった時の男女の比率や配置も、教師個々の判断に委ねている。

「5分、10分でもいいので、生徒が互いに力を引き出す場面をつくるのが、学び合いの要です。それさえ学校全体で共有できているれば、形にこだわらなくてもよいというのが本校の考えです。先生方に抵抗なく受け入れられたのも、授業スタイルを固定させず、教師の判断で自由に授業を組み立てられる柔軟

性を持たせたからだと思っています」(岡野校長)

生徒に役割を持たせ 学び合いを活発化

学び合いは、教わる生徒・教える生徒の双方に利点がある。授業を理解していない生徒は、授業中でも他の生徒に質問できる。教える側も、自分の言葉で説明することによって理解が深まり、実は理解の浅かった部分が明確になる。また、教科学力の定着だけでなく、社会で生きる力を付けることにもつながる。

「勉強が出来る人に学び合いは損」と言う生徒もいます。しかし、社会に出ればチームで仕事をすることがほとんどです。出来る人が出来ない人を助ける場面はいくらでもあり、そのたびに不満を抱いていたのでは仕事は出来ません。協同学習を通して、学力の定着だけでなく、コミュニケーションの大切さを知り、さまざまな考えを持つ人がいることを実感してほしいと思います」(杉山先生)

それだけに、学び合いの活性化は、教師の工夫のしどころである。例えば、グループで演習問題に取り組ませる際、必ずグループ全員が理解できるまで教え合うよう指示し、理解できたところ、出来なかったところを明確にさせる。更に、このプロセスを教師が指示するのではなく、各グループの代表者1人に委ね、口頭で

図2 課題プリント例 (数学)

数学Ⅱ <『指数関数』復習テスト> 角軍 先生
 [問題] 次の問いに答えよ。

(1) 次の方程式・不等式を解け。

① $(\frac{1}{8})^x = 16^{-2x+1}$ ② $9^{-x+1} = (\frac{1}{\sqrt{27}})^x$ ③ $(\frac{1}{4})^{x-1} \leq \frac{1}{2}$

解 解 解

$x=2$ $x=4$ $x \geq 2$

(2) 次の計算をせよ。

① $2\log_3 \frac{2}{3} + \log_3 \frac{4}{5} - 2\log_3 \frac{4}{3}$ ② $(\log_3 4 + \log_3 4)(\log_3 27 - \log_3 9)$

解 解

-1 6

(3) 次の方程式を解け。 $9^x + 3^{x+1} - 18 = 0$

解

$x=1$

★早くできた班は、次の問題を班で考えてみましょう。
 次の方程式を解け。 $9^x - 3^{x+1} - 18 = 0$

■各班の第2象限の人が他の班員に伝える内容 ■ ※「これ、読んでやってください」はダメ!

(1) 各自でテストの振り返りをする → 上の解答を参考にする

(2) 解答できなかった問題は、班の中で教え合っ
て班員全員が理解できるように努める。
→ 班で解決できなかった問題があれば、第1象限の人は前のホワイトボードに貼っている【解答・解説】を調べて、班の人に伝えること。

(3) どが理解できていなかったのか、なぜできなかったのかを意見交換して、班で出た意見をまとめる。(まとめ役は、第4象限の人)
→ 各自、下の枠に自分ができなかった理由を書くこと。
→ きちんと発表ができるようにまとめること。

(4) 第3象限の人は、(3)でまとめた意見を発表する。

発表までの制限時間は15分間です。

◎どうしようもなく間違っていたらできなかつたのりを振り返り
 (例)・○○のところからなかった
 ・斜線が足りなかつた
 ・○○のところを忘れていた ……

荒金先生の課題プリント。前時のテストの復習をグループで行うため、問題文の下に「まとめ役」の生徒への具体的な指示があり、メンバーに口頭で伝えるよう徹底している *学校資料をそのまま掲載

教師の生徒理解が促進し
 授業改善への意識も高まる

学び合いの導入により、授業に対する教師の

他のメンバーに伝えさせる場合もある(図2)。役割を明確にして責任を持たせ、グループ間の質問や意見交換を活発にさせる工夫である。小テストも方法次第で、協同学習を活発化するツールになる。グループ全員が満点だったらボーナスとして更に1点を与えるとす。すると、生徒は「みんなで満点を取ってボーナス点をもらおう」「1人だけ出来なければみんなに迷惑がかかる」と考え、自ずと学び合いにも熱が入るといわけだ。

意識は大きく変わった。

「グループ活動では教師の発問が重要です。曖昧な指示は生徒を混乱させます。一斉授業では生徒への質問をその場で考えることが多かったのですが、グループ活動では何をどのようなタイミングで取り組ませるのか、どのような発問をするのかを事前に考えてから授業に臨むようになりました」(杉山先生)

「生徒が活動する場面が多いため、生徒個々の理解度や、生徒の人間関係が手に取るように分かるようになりました。生徒がうまく動かない時は、発問の仕方や演習の取り組ませ方を工夫するということのように、授業改善に向けた課題も明確になりました。試行錯誤を繰り返しながら、授業の質を高めていきたいと思っています」(荒金先生)

10年度は全教師の授業を撮影し、授業力の向上に生かす取り組みも始めた。「自分の授業を客観的に見ると、いか自分が話しすぎていたかがよく分かりました。不要な説明を減らし、その分、生徒の意欲を引き出

すような活動を取り入れるように心掛けています」(姫路先生)

以前に比べ、生徒や授業に関して教師同士でよく話すようになったのも一つの変化だ。

「生徒を伸ばしたい、良い授業をしたいという先生方の意欲が高まっていることを感じます」(岡野校長)

授業に対する生徒のかわり方も大きく変わった。私語や居眠りをする生徒がほとんどいなくなっただけでなく、積極的に授業にかかわろうとする生徒が増えたという。

「何よりもうれしいのは『考えたり話したりしないといけないので疲れる』という生徒の声を聞くことです。『疲れる』とは、授業中に生徒が頭を使っているということなんです。『先生の質問に対して考えるようになった』という声も多く、積極的に授業に参加しようとする生徒が増えていることを実感しています」(姫路先生)

今後の課題は、コミュニケーション力やプレゼンテーション力など、学力以外の成果も客観的に測ることだ。専門家の指導の下、生徒の意識調査を行い、学び合いの浸透度、学習集団としての成熟度を測定する予定だ。また、学び合いは不要と考えている生徒に対して、どのように意識付けを行うかも課題だ。すべての生徒が成長できたと実感できるよう、同校は不断の改善を進めていく考えだ。

目標とのギャップを埋める 2年生0学期への意識付け

2年生は生徒の学力差が拡大し、進路意識の醸成度にも差が出やすい学年である。

2年生になる前に、1年生として掲げた目標を再確認し、残された時間で出来る限りギャップを埋めるよう、動き始めさせることが重要だ。

目標の振り返りが2年生への第一歩だと認識したい。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

図1 教師のための「指導のブレ」振り返りシート

ダウンロード

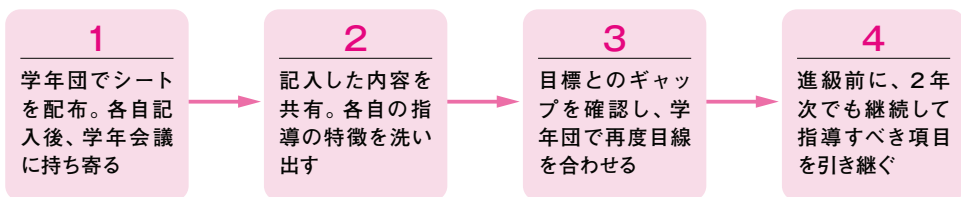
● 約束が守れていない生徒への指導状況を把握する

	4月当初の約束事	生徒の状況(多・少・なし)	どのような指導で改善を図っているか
授業	授業に集中していない	少	授業構成のメリハリをより意識している
	予習をしていない		
	復習が十分でない		
	宿題をやってこない		
	テストの復習が出来ていない		
クラス運営	提出物の締め切りを守らない		
	遅刻・早退をする		
	服装・頭髪のルールが守れない		
	掃除を怠っている		
部活動ほか	クラス活動への参加が消極的		
	部活をさぼりがち		
	下校後まっすぐ帰宅しない		
	ゲームや携帯電話に夢中		
	読書の習慣が身につけていない		
	大学・学部への関心が薄い		

● 成果が上がり、更に継続したい指導を把握する

	約束順守から更に伸ばす項目	生徒の状況(多・少・なし)	どのような指導が有効だったか
授業	予習・復習を欠かさない		
	積極的に質問に来る		
	不得意科目を克服した		
	得意科目を伸ばした		
	週・月単位で学習計画を立てている		
クラス運営	遅刻・早退が極めて少ない		
	授業開始時の着席が徹底している		
	服装・頭髪のルールが守れている		
	クラス活動が大いに盛り上がる		
	教室の清掃、整頓が出来ている		

● 振り返りシート活用のステップ



1
【教師間でのデータ活用】
4月の目標と現在の指導とのギャップに気付く

学年団全員の目線合わせのために

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラス α の指導

新しく学年団に入った教師への 引き継ぎ資料として活用

現1年生の指導を経験せずに次年度の2学年団に参加する教師にとって、**図1**は、生徒把握のための格好の資料となる。これにより学年団に参加する教師全員が生徒理解にプレがなく、根拠を持って指導に当たることが出来る。また、マイナスの情報だけでなく、指導が功を奏した学年団としての長所や、個々の生徒のプラスの面を伝えることによって、新しく学年団に加入した教師に対し、「この部分は更に伸ばしていこう」という前向きな引き継ぎを行うことが出来る。

生活指導のリスタートとして、 指導のプレを振り返る

衣替えのある6月や10月は、服装に対する指導の目線合わせが行われることから、生活指導に対する学年団の意識も高くなる。しかし、0学期に当たるこの時期は、衣替えなどもなく、生活指導全般に対する教師の意識はあまり高くない。この時点で指導のプレを振り返り、生活指導への教師の意識を改めて高め、学年で足並みをそろえた指導が出来るよう、リスタートを切りたい。

重要課題に対処する 特別チームを編成

図1の結果に基づいて指導に当たる際に、期間限定の対策チームを編成するのも有効だ。2年生までに絶対に改善しておくべき項目については、学年団の中で指導が特に成功している教師をリーダー役とし、目標とのギャップを埋める指導を実現したい。定期的に指導の進捗と生徒の状況を各教師がリーダーに報告し、目標の達成状況を確認する。最後まで改善を目指す学年団を維持すると共に、教師間の指導の継承を促すことにつながる。

活用後のフォロー

◎各教師が**図1**に記入した内容をクラスごとにまとめたい。各教師が把握した状況と模試の成績や定期テストの結果をクロスすることで、「授業への真剣度と成績」や「学校のルール順守と学力」などの相関を見ることが出来る。これまで各教師が感覚として認識していたような相関をデータとして示すことで、生徒への指導につながるだけでなく、教師間の指導力の継承としても有効だ。掃除や生活ルールを軽視する生徒に対しては格好の説得材料になり、保護者への意識付けとしても活用できる。更に、データを蓄積することで学校特有の文化が形成され、その学校での指導経験が少ない教師にとっても指導の足掛かりとすることが出来る。

データ活用
のねらい

各教師が指導を振り返り、共有する

2年生0学期の意味を理解する●2年生になると、生徒の学力や進路意識に大きく差が出始める。そこで、4月に定めた目標を振り返り、2年生になる前に基本的な約束事の再徹底を促したい。2年次進級前に目標とのギャップを埋めるために動き出すことが、2年生0学期の意味だと、まずは教師が理解したい。

4月の目標を基に指導のプレを是正●この時期は、学年団に「あと三か月でこの学年団から抜けるから」といった意識を持つ教師が現れ始め、指導の足並みがそろい難くなる。そこで、**図1**を使って、4月当初に定めた基礎的な約束事を守らせることが出来ているかを確認したい。学年会などで、評価の部分共有し合えば、「本当に生徒の現状が把握出来ているか」が明らかになる。また、生徒の実態の項目を基に「約束事を守らせるためにどういった指導を行っているか」や、「約束事を守れている生徒が少ないのに、なぜ指導を見直さないのか」といった、指導を振り返る機会とする。

データ活用
の流れ

個々の振り返りから学年団の取り組みに

振り返りを各自のリセットにつなげる●学年団で4月に定めた目標について生徒の現状を評価し、教師一人ひとりが自身の指導を振り返り、各項目についてどのようなアプローチをしているかを記述していく。学年会などで各自のシートを持ち寄り、発表することで、4月時点の取り決めがどれだけ生徒に浸透しているか、また、浸透していないものに対して各教師がどのような対策を講じているのか、学年で把握する。目標とのギャップが見えてきたら、改善に着手。2年生になる前に動き始める。

実態を踏まえた次年度計画の裏付けに●指導が徹底できていない項目については、優先的に2年生への引き継ぎ事項とする。次の学年団は、前学年団の振り返りを基に目標を設定できるので、生徒の実態に合った学年目標が立案できる。

目標との ギャップを見つけ 高2の計画立案に 生かす

学年会の前に**図1**を配布。4月当初の目標を振り返り、生徒の状況、個々の指導の現状を記入

4月の目標とのギャップが見えたら、改善に向けてすぐに着手する方法を検討

改善を要する項目について、成功事例の紹介などを通じて、学年団の指導力を底上げ

2年生になる前に改善に向けて取り組みを始める。それでも積み残した課題は、次年度への課題として引き継ぐ

ギャップから新たな目標設定

図2 入学時の目標と現在の自分とのギャップから新たな目標を設定する ダウンロード

	入学時の目標	現在の自分	ギャップを埋めるための進級までの目標
学習面			
生活面			
部活動やボランティア活動など			

文理選択を活用する

図3 文理選択による意欲の高まりを2年生につなげる先輩データ ダウンロード

	名前	志望学部	部活動	文理選択の決め手と、2年生で頑張っていること	1年生でもっと頑張っておけばよかったこと
文系	●●	文学部	サッカー部	英語を使う仕事に就きたくて、文系を選びました。2年生になっても英語の勉強に一番時間を掛けています。2年生になると英文も長くなり、単語や熟語もたくさん覚えなければなりません。毎日1時間は必ず予習していますよ。	古文漢文は1年生の学習内容が理解できていなかったの、2年生になっても苦労しています。1年生のうちに苦手をつぶしておかないと、2年生で勉強内容が難しくなって大変ですよ！
	○○	法学部	吹奏楽部	国家公務員に興味があったので、文系を選び、法学部を目指しています。公務員試験に強い国立大を志望しているの、5教科に苦手をつくらぬように、授業の予習復習を大切にしています。でも部活動との両立は大変！	2年生になると部活動も行事も本当に忙しくなるので、1年の時よりも勉強する時間を確保するのが大変です。時間のある1年生のうちに少しでも勉強面で貯金を作っておくことをオススメします。
理系	△△	理学部	テニス部	数学が好きだったので迷わず理系を選びました。一番頑張っているのももちろん数学です。模試の回数も増えて、全国レベルでの自分の学力が分かるのでやる気も出ます。	英語は苦手だったのであまり勉強したくないんですが、理系を選んで英語から逃げることは出来ません。むしろ、覚悟を決めて早めに勉強した方がいいと思います。
	▼▼	薬学部	書道部	文系に開く仕事に興味がありました。作業の得意不得意外に、理系に進級するまでの数か月の間に特に取り組んでおきたいことは何かという視点でアドバイスさせる	1年生の夏休みや冬休みは合間と、2年生に進級するまでの数か月の間に特に取り組んでおきたいことは何かという視点でアドバイスさせる

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご利用ください！右のウェブサイトをご覧ください。
 ●2007年2月号
 「2年生0学期の意識付け」
 ●2009年12月号
 「2年生0学期」を見通した1年生2月までの学習習慣の定着」

Benesse® 教育研究開発センター
<http://benesse.jp/berd/>
 生きたデータの徹底活用 クリック！
 HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
 生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください
 加工可能な資料が
 ダウンロードできます！

ウェブサイトから
 ダウンロード！
 生徒指導・
 進路指導ツール集

プラス α の指導

面談の優先順位を見極める

1年生3学期には早くも生徒の学力、進路意識の差が拡大し始める。進級前に巻き返しを図るためにも、**図2**、**3**を用いた面談での意識付けが重要になる。学校行事でとまった時間が確保できないときは、面談の優先順位を見極めたい。進級が危ない生徒は定期考査2週間前に面談を実施する。また、部活動を途中で辞めてしまった生徒などは、年度当初の目標を見て、気持ちが追い詰められてしまう可能性もある。一律に目標を振り返らせるだけでなく、リセットして新たな一歩を踏み出す支援も必要だ。

「基礎を大切に 教師のこだわり」を見せる

1年生の学習内容は、入試に必要な学力の基礎となると、その重要性を生徒に認識させることは重要だ。そのために、教師自身が基礎の定着にこだわる姿勢を見せたい。例えば、模試や校内テストでの復習を課外で行い、基礎的な事項のみの小問群を全問正解できるまで追試を繰り返す。基礎部分の正誤で追試か否かが決定するため、成績下位層が早々に合格することもありえる。苦手意識を過度に持たせない方策としても取り組んでみてはどうだろう。

学習以外の活動にも 広く目を向けさせる

生徒がやる気になっている新年という時期を利用して、学部・学科研究や大学研究などに新たに取り組ませたい。これにより、2年生のオープンキャンパスが更に効果的になる。また、さまざまな資格取得、ボランティアなどの学外活動にも目を向けさせ、生徒自身の興味と可能性を広げていく。そうして、学習以外にも頑張れることを見付けさせることが、結果的に進路選択に生きてくるはずだ。

活用後のフォロー

◎2年生になった自分をイメージしたり、入学時に描いた自分とのギャップを知ることで、生徒は「このままではいけない」と強く感じるはずだ。だが、そこで教師が何も手を打たなければ「2年生になってから変わればよい」と取り組みを先送りしてしまう可能性が高い。変わった方がいいのではないかと思ったタイミングを逃さずに、「今から少しずつやってみよう」と声を掛け、更に学習時間調査などを用いて変化を目に見える形にすることでモチベーションを維持させたい。今変わろうとしない者は2年生の4月になっても変わらないし、今は2年生で新たなスタートを切るために積み残しをなくしていく期間だと繰り返し伝えたい。

データ活用 のねらい

振り返りを2年生への目標設定につなげる

入学時の目標と現在の自分のギャップに気付く●この時期には先の目標を意識させる前に入学時の目標を振り返り、今の自分と比較して、生徒に自分の足りない部分に気付かせることが重要だ。ギャップを埋めるための行動をすぐに開始させることで、生徒一人ひとりの1年生3学期が2年生0学期に変わっていく。

文理選択で高まった意識を維持させる●文理選択は高校生として初めての進路決定であるにもかかわらず、これを3学期のモチベーションとして利用するのは容易ではない。生徒の意欲向上に結び付きにくい理由の一つに、文理選択の結果が2年生での生活にどのように影響するかが生徒にとって分かり難く、文理選択による変化が見えづらいことが挙げられる。そこで**図3**のような先輩データを活用し、部活動などが同じ属性の先輩をモデルケースとし、「2年生ではこんな学習に取り組むのだ」といった自覚を持たせることが大切だ。

データ活用 の流れ

未来と過去から考えさせる

目標と現状のギャップから新たな目標を設定●入学時に生徒に書かせた高校生活への抱負や目標を生徒に返却し、自身の目標を振り返らせる。そして**図2**などに入学時の目標を記入させたら、現在の自分の状況と生じたギャップについて考えさせる。自身の不足を正確に把握できているか、教師は面談などで確認したい。その上で、ギャップを埋める取り組みを始められるよう支援していく。

自分と同じ属性の先輩データを励みにさせる●2年生の担任団に**図3**のようなデータ収集の主旨を説明し、協力を仰ぐ。その際は、2年生が今の自分を振り返ることにもつながることを付け加えたい。その後、文理別、部活動（運動部・文化部）別などで整理し、1年生に提示する。生徒は自分の属性と重なる先輩のデータを見て、危機感ややる気を持つはずだ。面談で似た属性の先輩を例にして、進級前の今必要な学習などを解説したい。

過去に描いた 目標と 未来の自分から 「今」を考える

図2を基に入学時の目標と今の自分とのギャップに気付かせる

図3で文理の別を中心とした2年生の様子を伝える

面談で**図2**を使い目標とのギャップを埋める方法を提示。また、**図3**を用い、2年生になる前に必要な学習と一緒に考える

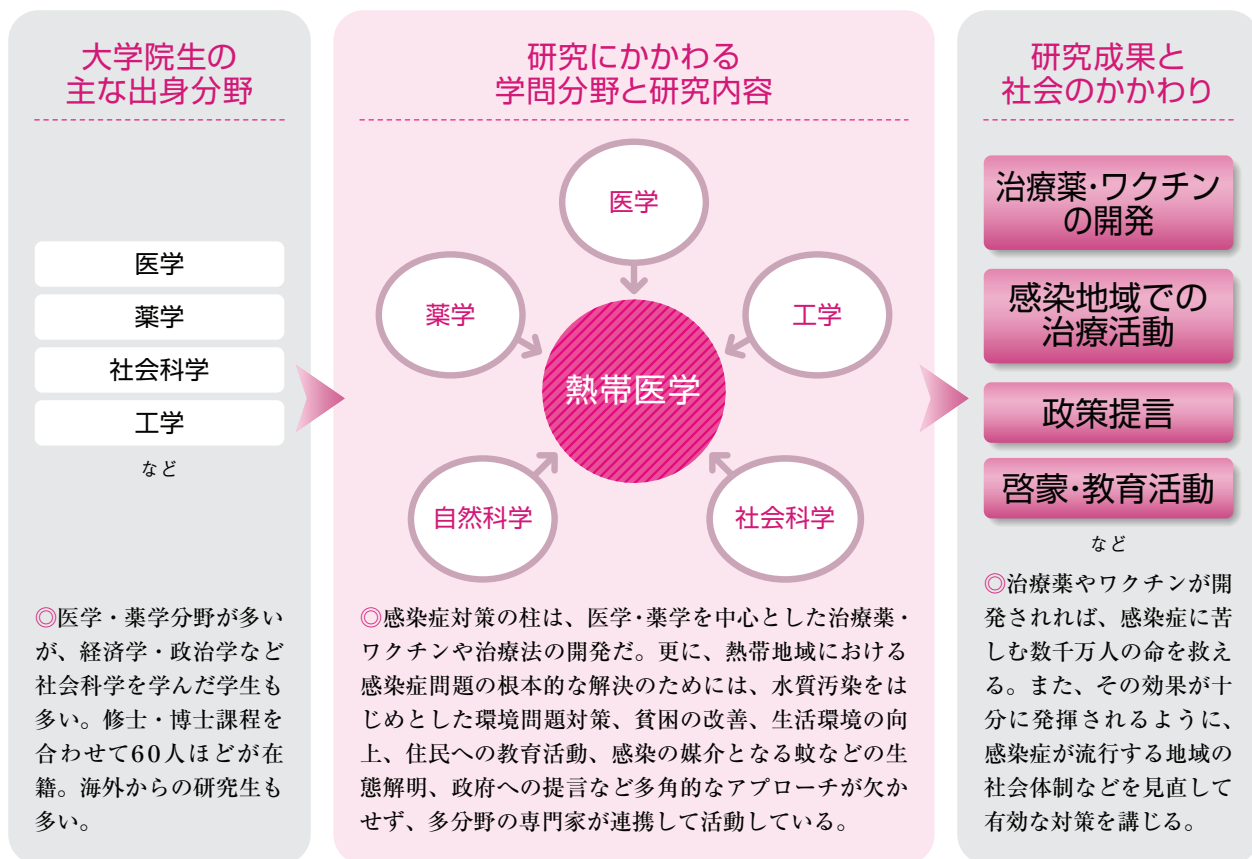
目標に近づくための取り組みが継続するよう日々の声掛けで支援する

医学を柱とした統合的な戦略で 感染症の脅威に立ち向かう

長崎大 熱帯医学研究所 平山謙二研究室

古くから人類は、感染症の脅威にさらされてきた。医療技術の発達した現代でも、エイズやSARS、マラリアをはじめ、いまだに克服されていない感染症は多い。長崎大・平山謙二教授が所長を務める熱帯医学研究所は、熱帯地域を中心に流行する感染症の問題に取り組んでいる。薬やワクチンの開発だけでなく、環境問題や貧困問題などの原因を根本から考えて統合的な戦略を打ち出し、人々が助け合いながら感染症を克服する社会を実現することが最大のテーマだ。

フローチャートで分かる熱帯医学研究所



信念を貫く強さを持ってほしい

熱帯医学分野が求める学生像

オープンマインド・協調性・柔軟性がある人

人のためになる仕事をしたい人

不利な状況にある人々を救いたいという信念を持てる人

熱帯医学の研究は、文系・理系を問わず、多分野の専門家が同じ方向を向いて連携する必要があります。「オープンマインド」「協調性」「柔軟性」の3要素は欠かせません。学会や会議、調査などで海外を訪れ、世界中の研究者と情報交換をする機会も多いため、国際的な感覚も求められます。そのような基本的な資質があれば、それぞれの専門分野を生かせることが熱帯医学の面白さともいえます。

研究は地道な作業の連続です。苦しくても粘り強く研究を続けるためには、「人のためになる仕事をしたい」という気持ちが原動力になります。熱帯地域の発展途上国に住む多くの人々は、経済的・生活環境的に不利な状況に置かれています。そうした地域で感染症に苦しむ人々を継続的に支えていく研究は、「人は誰も生きていく権利が平等にある」という信念を貫く強さがなければ務まらなると感じています。世界中の研究者と力を合わせ、世界を変えていくという大きな気持ちを持って、是非この世界に飛び込んでほしいと思います。

高校生へのメッセージ

価値観が柔軟な高校時代には、積極的に多くの人と話すように心掛けてください。そして、社会に対して問題意識を持ち、「何を変えればもっと良くなるか」を考えてみてください。そのためには、新聞やニュースから情報を得るのも大切ですが、ボランティア活動への参加など「現場」に足を運ぶことも貴重な体験になるはずです。



平三謙 教授 Hiroyana Kenji

長崎大熱帯医学研究所所長・教授。グローバルCOEプログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」拠点リーダー。東京医科歯科大学大学院博士課程修了。アメリカ・ハーバード大公衆衛生学部研究員、埼玉医科大学教授などを経て、長崎大熱帯医学研究所教授となり、2007年より現職。専門は免疫遺伝学、熱帯病学。熱帯病への抵抗力を遺伝子レベルで比較する研究などを続けている。

研究テーマ

熱帯地域の感染症を研究し 後進の医師を育てる

熱帯医学は、主にアフリカやアジア、南アメリカなどの熱帯地域で流行する感染症の問題に取り組みます。感染症は無数にありますが、

私たちの研究所では、特にエイズやSARS、マラリア、 Dengue熱などの研究に力を入れています。

熱帯地域で感染症が流行しやすい理由には、大きく二つの側面があります。一つは、気候や自然環境などによって、地域特有の「風土病」と呼ばれる病気が発生しやすい点です。例えば、熱帯地域に生息する蚊を媒介として感染するマラリアや Dengue熱は典型的な風土病です。もう一つは、劣悪な衛生環境や医療施設の不足などが原因で病気が発生する点です。熱帯地域は比較的貧しい国が多いためこのような理由で病気になるりやすく、それが風土的な条件と重なり感染症が流行しやすい状況にあるのです。

私が熱帯医学の道に進んだきっかけは、大学時代、日本に古くからあ

る住血吸虫症という感染症を研究したことでした。住血吸虫症は感染者によって症状が異なり、重症になる人もいれば、病状がほとんど悪化しない人もいます。これは、人によって体内の免疫の働き方が違うからです。

私が大学に通っていた1980年代は遺伝子治療の技術開発が始まった時期で、免疫をつかさどる遺伝子を解明すれば、住血吸虫症などの感染症を克服できる可能性があることを知り、研究意欲をかき立てられました。また、大学時代の恩師から、患者を直接治す医師だけではなく、医療の発展を支える基礎研究や後進の医師の育成に携わる医師の存在も不可欠と教わり、研究機関で研究する道を志すようになりました。

当時の日本では住血吸虫症は収束していましたが、中国や東南アジア、南米ではまだ大勢の患者がいました。そこで研究の場を海外に移そうと、大学院修了後、アメリカのハーバード大の研究所に留学。ブラジルなどの熱帯地域を訪れるなどして、本格的に熱帯医学に取り組みようになったのです。

熱帯医学が不要な社会の実現が究極の理想

熱帯医学の研究の醍醐味は、治療薬やワクチン、治療法などの開発により、何百万、何千万人もの命を救える可能性があることです。しかし、

感染症の対策は困難を極めます。日本で生活していると身近に脅威を感じませんが、現代にあっても感染症は世界の乳幼児の死亡原因の7割を占めていると知れば、問題の深刻さを理解してもらえましょう。

感染症対策が難しいのは、未解明の部分がとても多いからです。大勢の研究者が日夜、原因究明や治療法開発に取り組んでも、ウイルスや細菌は気候や環境などの変化によって性質を変異させるため、大変やっかいです。例えば、09年に世界中で流行した新型インフルエンザのウイルスは、元々鴨などが持っていたものが、豚をはじめとした動物を介して変異し、人間に感染した可能性が高いということが最近になって分かりました。また、コレラを引き起こすコレラ菌は、プラシクトンに付着し



写真 鎌状赤血球症の乳児の診察・現地調査の様子。これは重度の貧血を起こす遺伝性の病気であるが、この病を持つ人々はマラリアに感染しにくいことが認められている

て海上を漂っていることが、近年の研究で知られるようになりました。温暖化によって海水温が上昇すれば、プラシクトンの活動範囲が広がり、コレラ菌の北上が懸念されます。薬やワクチンを開発すれば、病気が治療できるというわけではありません。コレラは適切な治療をすれば完治する病気ですが、熱帯地域では今でもコレラで大勢の乳幼児が命を落としています。その大半は、お金がなくて病院に行けないのが理由です。悲しいことですが、それが現実なのです。

そのため、熱帯医学では、数日間病院に行けなくても切り抜ける方法

はないか、母親が簡単に子どものコレラを見分ける方法はないかなど、問題を根本から考えて解決策を探っています。その国の政府に治療費の支援を提言したり、感染源となる水質汚染の改善を図ったりするのにも重要な対策です。ほかに、蚊が媒介となる感染症の流行地域では、水たまりが出来ないように水路を設けたり、現地の人たちが病気を理解して「病気に打ち勝とう」という気持ちになるように教育をしたりと、熱帯医学の活動領域は多岐にわたります。せっかく薬が開発されても、それを作る製薬会社が「利益があまり得られない」という理由で十分な量を製造しないため、治療に結び付かないケースもあります。WHOや財団などに働き掛けて公的な支援を求め、不公平を是正して人々が助け合うシステムづくりも進め、既に一定の成果が表れています。

熱帯医学が必要のない世界を実現することが、私の究極の理想です。そんな思いを抱いて、人類にとって最大の脅威ともいえる感染症に立ち向かおうという若い医師が次々に現れることを期待しています。

用語解説

① **エイズ**
ヒト免疫不全ウイルス Human Immunodeficiency Virus (HIV) に感染することによって引き起こされる症状の総称。感染すると、体内の免疫機能が低下し、感染症や悪性腫瘍、運動障害などの神経症状が現れる。

② **SARS**
Severe Acute Respiratory Syndrome (略称)、日本語では「重症急性呼吸器症候群」。主に咳やくしゃみで感染し、発熱、咳などインフルエンザや肺炎に近い症状が見られる。

③ **マラリア**
ハマダラカを媒介に感染し、発熱や倦怠感、頭痛、筋肉痛などを発症。迅速な治療を受けないと、短期間で重症化し死亡する危険もある。

④ **デング熱**
主にネッタイシマカが媒介となる感染症。突然の発熱に加え、頭痛、筋肉痛、関節痛を伴うことが多い。

⑤ **住血吸虫症**
特定の淡水巻貝に寄生する住血吸虫により感染。日本では撲滅されたが現在も世界中で2億人が罹患し、合併症などで毎年2万人が死亡するとされる。

⑥ **コレラ**
コレラ菌に汚染された水や食物を摂取することによって感染。重症の場合は激しい下痢や嘔吐に襲われ、脱水症状に陥る。

デング熱の感染経路を 数理モデルで解明する



大木美香さん
Okita Mika

長崎大熱帯医学研究所国際保健学教室
博士前期課程2年
(静岡県私立・不二聖心女子学院高校卒業)

Q この分野に進んだきっかけを教えてください

A 高校1年生の時、祖父を病気で亡くしたのを機に医師を目指す決意をしました。大学卒業後は臨床医になりましたが、学生時代に海外留学をした経験から、世界に目を向けて働きたいと思うようになりました。世界の人々のパブリックヘルス（公衆衛生）に携わりたいというのも、熱帯医学を研究分野に選んだ理由です。現在は、臨床医として働きながら研究を進めています。

Q 現在の研究内容ややりがいを教えてください

A 熱帯地域で流行しやすいデング熱の感染経路を解明する数理モデルの構築を研究しています。これまで発生したデング熱の感染データを基に、推定される蚊の生息数や免疫を持つ人の数といった条件を数式に入力し、ウイルスを持つ一匹の蚊が人を刺し、その人から他の人に感染するという、デング熱が広まる日数やパターンを分析しています。それにより、例えば「この地域での感染者が〇人を超えたら一気に流行する恐れがある」など早期警報を出せるようになるからです。

デング熱のワクチンは開発中ですが、完成しても流行地域のすべての人に接種するのは困難です。そこで、どの地域の、どの年代に集中的に接種すれば効果的に流行を防げるかを判断する必要があります。そのシミュレーションにも数理モデルが使えます。入力条件を変えて他の感染症に応用するなどの汎用性も期待でき、世界中の人々の生命を守ることにつながる可能性がありますから研究には力が入ります。

デング熱は世界的に広がっており、台湾でも感染が確認されています。熱帯地域のものとは種類が違います。日本にもデング熱を媒介する蚊が生息します。実際、戦後に南方からの復員者を通じ、日本で流行したことがあります。いつ再流行しても不思議ではありません。

私は臨床医と研究医の両方を経験し、どちらの仕事にも魅力を感じています。臨床医として患者が回復していく姿は何物にも変え難い喜びですし、今の研究は自分の書いた論文が世界中の研究者に読まれ、世界を変えるかもしれないというスケールの大きさを感じています。今後いずれかの道を選ぶことになりましたが、両方の経験が生きていると思います。

皆さんに強調したいのは、夢や目標が見つかったら、ひたすら頑張っただけという時代から「頑張れないことは格好悪い」という気持ちで努力してきたことが、今につながっています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 研究では調査などで海外に行くこともあり、英語力は必須です。熱帯地域は英語圏ではないに越したことはありません。上手に話せなくてもよいので「とにかくコミュニケーションをしてみよう」という気持ちで、高校時代から語学力を磨いておけば、どんな仕事に就いてもプラスになると思います。

皆さんに強調したいのは、夢や目標が見つかったら、ひたすら頑張っただけという時代から「頑張れないことは格好悪い」という気持ちで努力してきたことが、今につながっています。

私の高校時代

はっきりした目標が 将来の自分につながる

●私の出身校は大学の系列高校ですが、大学には医学部がありませんでした。もともと医学部志望ではなかったので、高1の時に医学部進学を決めてからはかなり勉強しました。周囲から見たら少し異色の存在だったと思います。それでも頑張れたのは、「医者になりたい」というはっきりした目標があったからです。

最近、「夢を持ちにくい時代になった」といった言葉を聞くことがありますが、私はそうは思いません。夢や目標は時代の問題ではなく、自分自身で見つけるものだと思います。私は祖父が亡くなるまで医師になることなど考えもしませんでした。その時に自分の心が動いたのを見逃しませんでした。チャンスに出会った時、それをチャンスと感じ取るようにアンテナを高く張ると共に、自分の気持ちをよく見つめるようにすれば、夢や目標は見つかると思います。

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



「進学校の生徒だから」という思い込みを改め 得点力と読解力を育む指導を追究

山形県立酒田東高校

石山隆雄先生

30歳

私が乗り越えてきたもの

「進学校の生徒だから大丈夫」

新卒で酒田東高校に着任して4年間、国語科の先輩の先生と共に学年を持ち上がりました。丁寧に順を追って文章を読み取り、提出物も徹底するなど、手厚い指導を心掛けていました。

5年目、1年生の担任になった時は、学年団に国語教師は私一人でした。プレッシャーよりも「こんな指導をしてみたい」という期待の方が大きく、これまで抱いていた「進学校の生徒だから、もっと自主性を伸ばす指導をしてみたい」という思いを投影しました。生徒が文章を読みこなせているという前提で、読解プロセスの細かな解説よ

りも、文章全体の把握を目標にしたのです。演習プリントも作成し、最初は提出を義務付けていましたが、やがて任意としました。成績もある程度向上し、私は自分の指導の方向性が間違っていないと思っていました。

ところが、持ち上がりで担任していた2年生の秋、模試の成績が急落しました。特に現代文は、この時期から増える抽象的思考力を要する文章を全く読みこなせていなかったのです。

自主性尊重という名の無責任

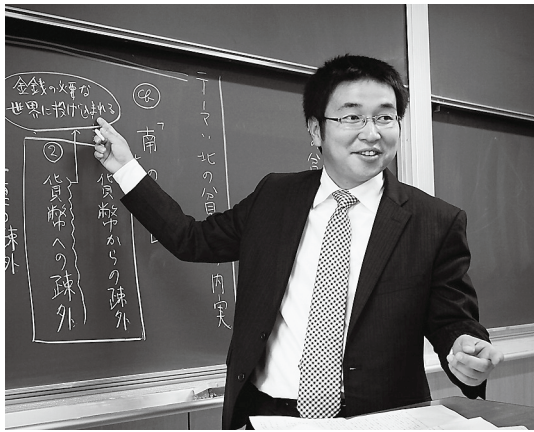
必死で原因を考え、思い至ったのは、

思い込みから目の前の生徒が見えなかった

丁寧に文章を読む習慣付けが不十分だったということです。「進学校の生徒なのだから、解答はどうやって導くかを解説しなくても、理解できているだろう」という甘い考えがありました。

また、演習プリントを任意提出としたことも、成績降下の原因となっていました。「もう家庭学習の習慣は付いているはずだ」という思い込みから、生徒がどの程度プリントに取り組んでいるかをつかめていなかったのです。

私は生徒の自主性を尊重したつもりでしたが、実際には無責任な指導をしていました。「進学校の生徒はこういうものだ」という私のイメージに生徒を当てはめ、「生徒任せの指導」をしてしまっていたのです。



いしやま・たかお ◎教職歴7年。同校に赴任して7年目。担当教科は国語。3学年担任。
山形県立酒田東高校 ◎全日制／普通科／共学。
10年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、山形大、筑波大、東京大などに139人が合格。私立大は明治大、立教大、早稲田大などに延べ209人が合格。

座談会

義務教育段階からの「学び直し」の課題と実践

— 国語を中心として —

2013年度に全面実施となる高校の新学習指導要領に「義務教育段階での学習内容の確実な定着」を重視する文言が明記された。国語の指導で義務教育段階の学習内容が身に付いていない生徒にどのような「学び直し」を実践しているのか。3人の先生方に現状と課題、実践内容について聞いた。

生徒の学びへの意欲を信じていることが大切

編集部 高校現場の実態を踏まえ、新学習指導要領には「学び直し」の機会の設定が記されました。今後、学び直しに取り組みむ学校が留意すべきことを教えてください。

北森 最も大切なのは、教師がしっかりとしたビジョンを持つことだと思います。「社会で必要な力を付けさせたい」「基礎学力のないまま、高校を卒業させてはいけない」という思いを教師全員で共有しなければ、指導の足並みを揃えることは出来ません。

鈴木 学習意欲に乏しく、教師に対して反抗的に見える生徒でも、根本的には勉強が出来るようになりたいと思っています。周りの大人に温かく包みこんでもらうことによって信頼関係が生まれ、自然と前を向けるようになるのです。良い教材を用意することはもちろん大切です。生徒と教師の信頼関係を築けるかどうか、学び直しの成否を左右する最大の鍵にな

るのではないのでしょうか。

語彙力の低下により人間関係に問題が

編集部 ご勤務されている高校の入学時における国語力の課題を教えてください。

鈴木 生徒の語彙の少なさは、非常に大きな問題だと思います。気に入らないことがあると、何でも「うざい」の一言で済ませてしまいます。自分の感情を表現する言葉があまりにも乏しいため、友だちとけんかをしてうまく関係を修復できません。

卒業後に就職しても早期離職をしてしまう原因の多くは、人間関係にあると言われていますが、それはコミュニケーション能力の不足によって起こるものです。コミュニケーション能力は「生きる力」の根幹ですが、今の生徒にはその根底にあるべき語彙力が著しく不足していると感じています。基本的な漢字や簡単な文章が書けず業務日報などを作成できないために、解雇された例もあります。

藤原 確かに、抽象概念や抽象語が身に付いていない生徒が増えてきていることは大きな問題です。そのために、自分の感情を上手に言い表すことが出来ないのでしょうか。また、言葉の重要性や怖さというものもを自覚していない面もあるようです。話し方ひとつで、自分の能力や人間性まで評価されることに気付いていないのです。

三重県立朝明高校



鈴木建生 Suzuki Takeo
教職歴33年。同校に赴任して9年目。

学校プロフィール◎全日制。普通科。2年生からビジネス・進学・福祉・アスリート・自然環境の4コースを開設。大学・短大・専門学校への進学率は約3割。

三重県立飯野高校



藤原 歩 Fujiwara Ayumu
教職歴26年。同校に赴任して5年目。



北森 晃 Kitamori Akira
教職歴26年。同校に赴任して4年目。

学校プロフィール◎全日制。応用デザイン科・英語コミュニケーション科を設置。大学・短大・専門学校への進学率は約6割。

前任校は進学校でしたが、そのような学校でも6、7年程前から、敬語を使えない生徒が増えていました。言葉の力の低下は、全国の子どもに共通する現象だと思っています。家庭であまり会話を交わしてこなかったり、読書をする機会に恵まれなかったりと、問題の根は深いです。高校卒業後すぐに就職する生徒にとっては、高校の国語教育が社会に出た時に人間関係を築いていける力を身に付ける最後のチャンスとなるのです。

鈴木 抽象概念は自分の生き方や在り方を考える上でも重要です。自分をステップアップさせていく上で大切なことは、自分自身の現状を言葉で捉えて、何が足りないのか、何をすべきかを考えることです。大人でも喜びや悲しみ、悔しさ、期待、失望などの感情に振り回され、同じところをぐるぐると行ったり来たりすることがあります。自分を客観的に見つめ成長していくには、まず自分自身の感情を表現する言葉を見つけ、それを使いこなす力が必要です。

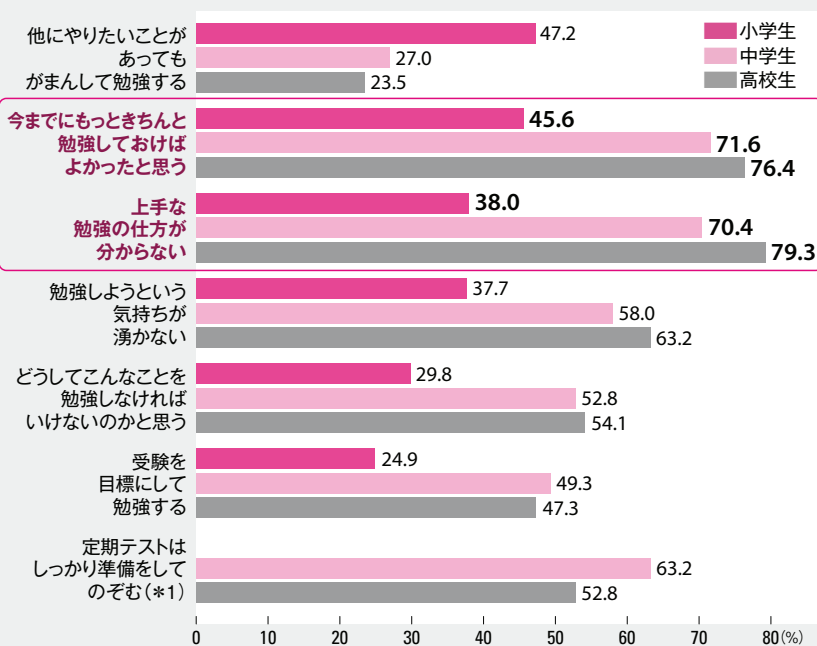
北森 生徒の語彙力、言語運用能

力の低下もさることながら、私は中高の国語教育の在り方にも課題があると思います。表現力を身に付けるにはアウトプットをさせなければいけません。国語の授業は一斉授業でインプットさせることに偏りがちです。私自身の反省も含めて、授業で表現力を鍛える

場をもっと用意しなければならぬと感じています。

**運用につながる
高校に合った学び直しを提示
編集部** 国語の学び直しの目標は何でしょうか。

図 勉強への取り組み(学校段階別)



※数値は「とてもそう」と「まあそう」の合計 *1 回答は中学生と高校生のみ
中学生で、「今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」「上手な勉強の仕方が分からない」の肯定率(「とてもそう」+「まあそう」の合計)は7割を超えている。高校ではその傾向がどちらの項目でも強まる
出典/Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年調査) ■調査期間:2009年8~10月 ■調査対象:小学生3,561人(18校)、中学生3,917人(12校)、高校生6,319人(13校)

北森 一つは、これまで話してきた社会で生きていく力の育成、もう一つは小・中学校の学習内容と高校の学習内容との接続です。1年生で小・中学校段階の学び直しを終え、2年生には高校段階の内容に入れるようにするのが理想です。そのためには、高校の教科書を読む上で欠かせない抽象概念を、しっかり身に付けさせることがポイントになると思います。

鈴木 指導が難しいのは、国語には数学や英語のように中高にわたる系統的なカリキュラムが組み立てられないため、高校における学び直しの方法が確立されていないことです。

本校で学び直しに取り組み始めた当初、基礎が身に付いていない生徒なのだから、小・中学校レベルの簡単な内容に取り組ませればよいだろうと考えていました。しかし、課題が小学生レベルの問題だと分かると、生徒はたとえ自分はその問題を解けなくても真面目に取り組もうとしなくなります。小学校時代なら、漢字の書き取りのような機械的な作業にも熱心に

取り組みますが、高校段階になると考えさせる教材を用意する必要があると実感しました。

北森 確かに、いくら学力が身に付いていない生徒でも、単純な学習だけを強いては続けることは難しいでしょう。漢字の書き取りを黙々とさせることも大切ですが、意味を理解せずにただひたすら書き取りを繰り返すだけでは、運用能力は身に付きません。漢字の成り立ちや使い方も一緒に教え、興味・関心を喚起してはじめて学びが定着するのはないでしょうか。
藤原 単語や敬語などを単体で教えても、国語の力は伸びません。生徒の国語力が伸びる時は、他の能力と一緒に伸びていくものです。小説や評論などさまざまな分野の文章を読み、俳句や漢詩などの文芸作品を正しく理解するためには、英語や地理・歴史、理科、家庭や保健体育に至る、あらゆる教科・科目の知識が必要です。いろいろなことに興味を持って貪欲に知識を吸収していく生徒が、結果的に国語の力も伸びていくのだと思います。教師もさまざまな知識と関連付けて教えていく必要があるのです。

識と関連付けて教えていく必要があるのです。

生徒の学習意欲を高める工夫が大切

編集部 高校生の発達段階に適切な内容や教材を精選することが大切ということでしょうか。

北森 その通りです。ただし、それ以上に大切なのは、生徒の意欲や興味・関心をいかに引き出すかということだと思います。学び直しが必要な生徒の大半は、何かしらの事情があつて小・中学校時代に学習する機会に恵まれていなかったのだと思います。勉強が出来たという達成感や、教師に認められたという経験に乏しいため、学習への意欲を持つことが出来ないまま高校までできてしまったのです。まずは生徒に学びに向かう姿勢を持たせることこそ重要であり、その上ではじめて教材が生きてくるのだと思います。

鈴木 私も、学び直しと学習意欲は表裏一体の関係にあると思います。どんなに良い教材を使つて

も、生徒が取り組まなければ意味がありません。何を教えるかということよりも、教師がいかに生徒にかかわっていくか、生徒同士がいかにかわり合えるかということが、学び直しを成功させる大きなポイントになると思います。

編集部 生徒の学習意欲を高めるにはどのような工夫が考えられるでしょうか。

北森 生徒の「文化」に教師が近づいていくことが、一つの方法ではないでしょうか。例えば、恋愛話は生徒の関心が高く、古典文学でもテーマによく取り上げられているので、「つかみ」として話す方法が考えられます。生徒の興味・関心や生活との接点を持たせることによって、実感を伴って教材に取り組めるようになります。

鈴木 以前、授業で『大和物語』の「娘捨」を取り上げた時にちょうど、介護を苦にして親を殺めるという事件が起きました。事件の新聞記事を読ませてから授業に入ったところ、生徒は非常に高い関心を示しました。千年以上の昔に同じような問題が起きていたと

知り、自分たちとは無関係の世界のことだと感じていた古典文学をリアルに受け止めることが出来たのです。まずは生徒の目線に立つこと。「何で意欲を持たないんだ」と教師の一方的な押し付けではなく、生徒が興味を持てるような工夫が必要なのです。

なぜ学ぶのか目的を明確にすることで意欲を高める

藤原 「この先生の授業を受ければ確実に力が伸びる」という実感を生徒が持つことも大切だと思います。「自分にも文章が読める」「文章の構造が理解できる」と思わせることが出来れば、その授業は成功です。そのためには、文章読解の基礎となる文法にも取り組んでおかなければなりません。

編集部 文法に苦手意識を持つ生徒は大勢います。拒否反応を起こさせないための指導の工夫はありますか。

藤原 英語で文法の構造を学習している中で、それに置き換えて説明することによって生徒の理解が

進むこともあります。古典で「べし」が出てきたら、「それは英語でいうとYesのことだよ」と説明する。そちらの方が案外、生徒には分かりやすいようです。英語と古典の文法を整理して対照表をつくれれば、英語の得意な生徒にはすんなり頭に入っていくかもしれません。また、現代文においても英



語の学習を通じて、日本語の特徴的な構造を理解することもあるようです。

北森 もう一つ大切なことは、なぜこれを学ぶのかをきちんと説明しながら進めることです。「動詞の活用は、もっと難しい助動詞の活用をする際に生きてくる」というように、文法を学ぶことによつてどのような力が付くのか、今学んでいる単元がこの先のどこにつながっていくのか、ということを生徒に示しながら授業を進める配慮が欠かせません。

鈴木 私も、学習の目的を明確にすることは、学習意欲を高める上で欠かせない要素だと思います。感情を表す言葉を学ぶことが、自分の人生を豊かにすることにもつながるように、必ず生徒に授業の目標を伝え、この時間でどのような力を付けられるのかを明確にしてから授業を始めるように心掛けています。自分の人生にかかわる必要不可欠な学びであることが分かれば、生徒は前向きに授業に取り組めます。

編集部 目的が明確だからこそ、

「出来た」という達成感も得られ、それによって学習意欲も高まるというわけですね。

藤原 学び直しの目標は、成功体験にあると思います。小・中学校で出来なかった内容を、諦めずに高校でもう一度取り組み、出来たという達成感を味わう。たとえ学んだ内容は忘れてしまったとしても、とことん学んでいれば「自分にも出来る」という成功体験が生徒の中に残ります。学ぶことで自分は成長していく、そういう人としての在り方、生き方のようなものを、学び直しを通して気付かせてあげたいと思っています。

北森 国語は社会に出ても必ず使います。どの生徒にとっても生きていく上で必要な力なのです。そうした意味で、国語の学び直しは「生きていく力を養う」という命題を担っています。

鈴木 成功体験の付与と確かな学力の育成により、社会で生き抜く力を付けさせるからこそ、学び直しの意義なのだと思います。

編集部 本日はありがとうございます。

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

意欲的な学生を鍛える 専門性の高い少人数教育

学生の学力低下への対応が叫ばれる一方で、意欲や学力の高い学生を選抜して少人数教育を行う大学がある。大学は、どのような狙いからこうした選抜制プログラムを導入しているのだろうか。選抜制の形式は、学生の意識や意欲にどのような効果があるのだろうか。

意欲の高い学生に対し 学部教育に1+αの授業を行う

学生の学力や意識の多様化を受け、多くの大学がリメディアル教育に力を入れるようになった。その一方、より意識の高い学生を対象に、学部教育に加えて少人数制による高度な教育を実施する動きも見られる。掲げた教育目標を実現するために、大学が本腰を入れている動きといえそうだ。

今回は、大学の理念や特色を踏まえた少人数制の特別プログラム

を設ける二つの事例を取り上げる。特に、プログラムの内容が学生の学びやキャリアに対する意識にどのように作用し、成長を促しているかに着目したい。

少人数でフィールドワーク を重ね、実践力を付ける

愛媛大法文学部
「特別コース（地域・観光まちづくりコース）」

愛媛大法文学部は「地域コース」「観光まちづくりコース（観光政策系・観光文化系）」といった「特別コース」を設置し、少人数教育を実施している。国立大学法人化以

降、愛媛大が「地域にあって輝く大学」を掲げて地域貢献を図ったこと、観光振興を目指す地元自治体や経済界から要望があったことなどが、設置の背景にある。

定員は、地域コース10人、観光まちづくりコース20人（観光政策系と観光文化系各10人）。このうち半数をAO入試で選抜する。その理由を、観光まちづくりコース長の寺谷亮司教授は次のように話す。

「近年、フィールドワークや現場に関心のある学生が減ってきています。学力だけでなく、自ら現場を訪れ、問題を発見し、解決策を

考えられる、積極的な学生に入学してほしいという思いから、AO入試を行っています」

入試では、地域活性化や観光をテーマにしたプレゼンテーション（20分間）が課される。地域コース3年の米森萌さんが「友だちが受験勉強をする中で、一人だけプレゼンの準備をするのは不安でした。でも、地域活性化に興味があり、それを学ぶにはこのコースしかないと必死に準備しました」と振り返るように、AO入試で入学した学生の意欲は高い。残りの半数は、一般入試で入学した学生が2年進

図1 愛媛大文学部地域コースの活動(2008年度)

日程	活動
4月	合宿(伊予市双海町) まちづくりに関するヒアリング、地域コース交流会
6月	フィールドワーク(大分県湯布院、黒川、別府) ツーリズム、まちづくり、地域活性化に関するヒアリング
7月	地域交流(松山市大街道、銀天街) ヨーヨー釣り、くじびぎなどを夜市に出店
9月	フィールドワーク(京都府綾部市、南丹市美山町) 過疎地のまちづくり、むらづくりに関するヒアリング
11月	フィールドワーク(宇和島市きさいやロード) 中心商店街活性化に関する調査、商店主・通行人へのヒアリング
2月	フィールドワーク(大分県宇佐市安心院町) グリーンツーリズム、地域活性化に関するヒアリング
3月	報告書作成 2008年度フィールドワーク報告

地域コース2期生の1年次の活動。通常の学部生は2~3年次で年1~2回程度のフィールドワークを行うが、このコースでは1年次から5回実施。事前準備、実施後のまとめにもしっかり時間をかける
*学校資料を基に編集部で作成

級時のコース選択で選ぶ。

カリキュラムの特徴は、1年次から週1回あるゼミ形式の授業で、県内外の各地を訪れてフィールドワークを行うことだ。年2~3回の本格的なフィールドワークの他、日帰りで県内各地を調査する機会も多い。

地域コースの宮崎幹朗教授は「1年次から、人の話を聞き、論文にまとめる経験を徹底的に積み重ねさせます」と話す。例えば、観光まちづくりコース観光文化系では、1年次の授業で道後温泉の調査を続けている。観光まちづくりコースの井口梓

特命准教授は「授業の3回に1回は

現地を訪れ、調査をします。学生が関心のあるテーマを中心に、授業で学んだ調査方法を使いながらフィールドワークをしています。また、授業で身に付けたスキルを定着させるため、自主的に課外活動を行うようにも伝えていきます」と話す。観光まちづくりコース1年の織田加寿代さんは「夏休みに5泊6日で大分県の湯布院でフィールドワークをし、9月に開かれた北海道網走市の『全国大学生旅プランコンペin網走』には課外活動で参加し、市長賞を受賞しました。失敗

は覚悟の上で、勉強だと思いません。さまざまな調査に挑戦しています」と声を弾ませる。教員が事前交渉をある程度行い、取材日の交渉などは学生に任せ

らは、自分たちで調査先も見つけ、交渉し、調査させています」と話す。こうした活動を通して、学生は知識だけでなく、ものの見方や考え方を学ぶ。寺谷教授は「話をうのみにせず、問題意識を持ちながら聞く力

も磨いてほしいと考えています」という。米森さんは「高校では受験のための勉強でしたが、大学では自分の足を使って学び、文献により知識を積み重ねていきます。高校とは学びの質が違っていると語る。

調査先で対立する価値観に触れ、学生が戸惑うこともある。09年度に地域コースの1年生が埋め立て・架橋計画問題で揺れる広島県福山市を調査した際、賛成と反対のそれぞれの立場の話を聞くうちに考えが混乱したという。答えが一つではない問題と向き合いながら、自ら考えて論文をまとめ上げることで力を付けていくのだ。

仲間意識を強め、 学び合う集団に成長

学生は、調査結果のまとめや論文作成のために、授業以外にも頻繁に

研究室に集まる。グループワークで学生同士が刺激し合う教育効果は高い。井口特命准教授は「グループの中でリーダーとなる学生、聞き取りが得意な学生、ノートを取るのが上手な学生、交渉がうまい学生など、自分の得意な事柄や役割に気付く効果があります」と話す。宮崎教授は「学生は研究室の中で居場所を見つけ、仲間がいる心強さを感じることも学びに向かうようです。先輩・後輩の関係も強く、学年を超えて学び合う姿も見られます」と話す。

地元の要望を受けて設置されたコースであるため、例えば観光コースでは、愛媛県と3か年計画の連携事業に取り組み、県内市町村からの連携の依頼もある。しかし、現状では学生に意見を聞いたり、活気ももたらしてほしいという程度のものであり、今後いかに地域の期待に応えていくかが課題の一つだ。

また、専門性を直接生かせる就職先の受け皿が少ないことも今後の懸念だと、井口特命准教授は話す。「私たち自身が学生の就職先を広げる努力をしていかなければならないと考えています」

徹底的に学ばせる指導で 中国に強い人材を養成

亜細亜大
「アジア夢カレッジ」

亜細亜大は、2004年度、中国に特化したキャリア開発プログラム「アジア夢カレッジ」を導入した。各学部にも所属しながらも、中国語や中国の文化・習慣などを、5か月間で集中的に学ぶ4年間の特別コースだ。アジア夢カレッジ運営委員長を務める石川幸一教授は、「アジア地域に強い人材を育てる本学の理念を体現したプログラムです。年々、重要度が高まる中国とのビジネスで生かせる実践力の養成に重点を置いていきます」と話す。

プログラムが求める到達レベルは高く、通常の学部教育と並行して受けることもあり、一般の学生に比べ負担がかなり大きい。十分な基礎学力に加え、相応の覚悟と意欲を備えた学生でなければ脱落する可能性があるため、選抜試験では学習意欲や志望動機が重視される。留学中は語学研修に加え、1か月間のイン

ターンシップに参加することなどから、精神的な強さも必須の条件だ。こうした厳しさが学生間に伝わっているためか、定員の40人に満たないこともあるが、追加募集はしない。

4年間を一貫する方針は、自分で考え、積極的に動く「考動力」を育てること。1年次から自己テーマを設定し、自分で調べてレポートを作成したり、プレゼンテーションや議論をしたりする力を育てる。レポート作成では、文献調査だけでなく、インタビューやアンケートなど、自ら動いて調査する姿勢を重視。教員は学生を支援するが、あくまで自分で考えさせる指導に徹する。

高い壁を乗り越えた 経験が自信となる

キャリアの土台となる知識やスキルの習得にも力を注ぐ。とりわけ中国語力の養成は徹底して行い、レベル別の少人数授業や多くの補講を実施する。1年次で中国語検定3級に合格しなければ、2年次の留学が許可されないため、どの学生も自主勉強会に参加するなどして必死に勉強

する。国際関係学部の三橋秀彦准教授は、「中国語検定3級は、英語でいえばTOEIC 600点台後半に相当する難度だと捉えています。一から学習を始める学生にとっては、毎日2、3時間自習をしなければ合格は困難です。これをクリアすれば、留学先での意思疎通は問題がなくなる上に、大きな自信となつて成長への弾みとなります」と話す。

留学先では、学生寮での中国人学生との共同生活を通じて異文化理解を深める。また、現地の日系企業で1か月間のインターンシップを行う。取引先の企業に訪問したり、商品開発に携わったりしながら、自分の力を試し、将来を具体的に思い描く機会となる。

3、4年次は、プログラムの比重は軽くなり、自己テーマを深めて論文を作成しながら、所属学部の専門

図2 亜細亜大「アジア夢カレッジ」のプログラム

	専門分野	中国理解
1年次	・フィールドワーク ・基礎ゼミⅠ	・中国キャリア開発入門Ⅰ・Ⅱ ・中国研究Ⅰ
2年次	・基礎ゼミⅡ	・現代アジアのひとと社会 ・現代アジアと中国
	大連留学&インターンシップ ◎大連外国語学院留学 ・中国語 ・中国の仕事と生活 ・知の探検 (中国の伝統と文化) ◎インターンシップ ◎自己テーマ研究、調査	
3年次	・応用ゼミⅠ・Ⅱ	・中国ビジネス法務 ・現代アジアとキャリアデザイン
4年次	・成果指導ゼミⅠ・Ⅱ	

学部の授業と「アジア夢カレッジ」の授業を並行して受けることで、学部の専門性とアジアの専門性の両方が身に付くカリキュラムとなっている

*学校資料を基に編集部で作成

性を高める期間に充てられる。三橋准教授は、「中国人とビジネスとしてのコミュニケーションが出来たという自信は、『考動力』に結び付き置かれるため、プログラムで得た経験と自信を学部の学習でどう生かしていくのか、そして我々はどうか支援していくかが課題です」と語る。

国際関係学部3年の船岡勇甫さんは、「本学は第1志望ではありませんでした。『アジア夢カレッジ』に参加し、1年次から前向きな気持ちで学べました。高校時代よりも必

自分の頭と足を使って
考えることの重要性に気付く



愛媛大法文学部
総合政策学科地域コース4年
木ノ下康司
(愛媛県立伊予高校卒業)

私は愛媛県伊予市出身で、元々地域の活性化に関心があり、地域コースを選びました。

これまで、フィールドワークや課外活動などの体験を重ね、毎年1冊、グループで論文を作成してきました。1年生から論文を作成するのは他コースではほとんどありません。その論文を基に「日本学生経済ゼミナール大会」に毎年参加し、ディベートをします。その際には必ず全員が発言します。全員が協力して論文を作成しているため、自信を持って意見を言えるのです。

考えを深めながらフィールドワークや論文作成を積み重ねることによって、必要な知識が自ずと定着することに気が付き、考えることの重要性を実感しました。また、現地ではさまざまな立場や年齢の人と話す機会があり、初対面の人とコミュニケーションを取る力も磨かれたと思います。

卒業論文は、入学時からかわってきた地元の伊予市の事例を織り交ぜながら、地方都市における中心市街地の活性化をテーマに取り組んでいます。

自分の考えを表現する大切さを
インターンシップで痛感



亜細亜大国際関係学部
国際関係学科4年
井山莉
(神奈川県・私立横須賀学院高校卒業)

中国への関心が高く、学生への支援が非常に厚い「アジア夢カレッジ」で学べば、大学生活が充実しそうだと思い、亜細亜大に入学しました。実際に4年間プログラムを経験し、中国語の勉強はかなり大変でしたが、意欲のある学生をとことん支援してくれるプログラムだと実感しています。

最も成長できたきっかけは、留学先の日系食品メーカーでのインターンシップです。現地の店に商品を提案したり、中国向けの新商品を開発したりする中で、自分の頭で考えて行動することや、言語も文化も違う人に自分の考えを伝えることの難しさを痛感しました。多くの社会人と話し、自信も付きました。就職活動での初めての面接では、面接官から「堂々として、初めてとは思えない」と驚かれました。

就職は、中国ともかわかりが深い旅行会社社に決めました。プログラムを通して、日中ビジネスに携わりたいという思いが強まったからです。将来的には、中国で仕事したいと考えています。

死に勉強し、中国語検定の合格やインターンシップの経験は何より大きな自信となりました。語学だけでなく、文化やビジネスについても中国に精通することが出来、周囲とは違う力が付いたと思います」と話す。

これまでプログラム受講者の就職率は100%で、内定が決まる時期も一般の学生に比べて早い。三橋准教授は、「学生の目的意識の高さに加え、インターンシップなどを通じて多くの社会人と接する経験からコミュニケーション能力が高まることも、就職活動に好影響をもたらしていると考えています」と語る。

このように「アジア夢カレッジ」の受講者は、意欲や学習成果などの水準が高い。同大学ではそれを他の学生にいかに関及させていくかを、今後の課題としている。

進路指導に生かす

目的意識が高い学生には
学び方にも注目させたい

選抜制プログラムの背景には、意欲のある学生を埋もれさせずに、大学の独自性を生かし、社会的な要望に応える資質を備えた人材を養成し

たいという考えがあるようだ。今回紹介した二つのプログラムにも、大学の理念が色濃く反映されている。また、選抜制は、意欲の高い学生を顕在化する手段としても機能している。更に、少数数で授業を行うことにより、学生は責任感を持ち、前向きに学習に取り組むため、このような学習形態とする意義は大きい。

将来の希望が明確な生徒にとっても、厳しくても高い成果が期待できるプログラムは魅力的な選択肢になるだろう。たとえ第1志望でなくても、入学後の目標を持てるのであれば、不本意入学というミスマッチは起こりにくい。学びたい学問が合致するならば、選抜制プログラムのような学び方のある大学を視野に入れるのもよいだろう。大学名や学部だけでなく、大学での学び方について深く考え、将来像を描くきっかけにもなるはずだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

すぐに結果を求めず、「待つ」ことの大切さを痛感
10月号特集の座談会を読み、「考えさせる」「考えるまで待つ」指導は、本当に必要なことだと感じた。しかし、現実的には、教師の側にそれだけの忍耐力がない。即座に結果を求めてしまうのは、生徒だけではなく、教師も同じであると思う。長い目で生徒の成長を支援し、待ち、生徒に本当の「自己教育力」が育成されることを見守りたいと思う。
〔徳島県・匿名希望〕

ポイントを踏まえ、書かせる指導を進めたい

10月号特集の座談会では、「書くこと」の重要性を再認識した。頭の中にあることを書く際、背景にある知識や経験、未来への論理的な展望がないと、なかなか表現できない。特に、作文やレポートなどの長い文章を書くことが好きな生徒とそうでない生徒の差が極端である。「生徒は書くことが嫌いなのか」と感じていたが、書くための背景がなく、また、評価を気にしているので書けないのだと分かった。ポイントを踏まえた上で、改めて、書かせることにより一層力を入れていきたいと感じた。
〔宮城県・常盤木学園高校・高谷将宏〕

日常的な取り組みの中に

新課程で求められる力の育成のヒントがある

10月号「新課程への助走」での広島県立志海高校の実践から、どの教科の指導においても、生徒が調べて、まとめて、発表することの重要性が見えた。目新しくなくても、どの教師も大なり小なり実践していることを全教科で取り組むことが重要なのだと感じた。更に、日々の言語活動における何げない導き、例として書かれていた「先生、

VIEW'S SQUARE

Volume 5

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

鍵」と言う生徒に対して「どの鍵を何のために
どうしたいの」という問い掛けをきちんと実践していることが、大上段に振りかざした新課程への取り組みなどではなく、日々の教育活動の中で、どこの学校でも取り組める例になり得ていると思った。「奈良県・育英西中学・高校久保貴芳」

今後の伸びを見せることが生徒を学習に向かわせる

10月号「生きたデータの徹底活用」で紹介された、3年生0学期の自宅学習計画・記録表にある「3か月この時間学習を続けた時の偏差値の伸び」は、非常に面白いと感じた。学習時間と偏差値の推移をデータに蓄積することも大切だが、それよりも、生徒がどれだけ頑張ればいいのかを具体的にイメージさせることが、学習につながるのだと実感した。
〔島根県・匿名希望〕

授業で教えるのは「教科書の裏側にある知恵」

10月号「30代教師の転起」の立神先生の記事は、若い先生の成長ぶりが短時間で見られ、とても興味深かった。理想の授業が出来るようになるまでは試行錯誤の連続であり、教師であれば誰でも通る道のことと思う。授業とは「思考」させる場であり、それが基礎となって教科書の裏にある「知恵」をどう伝えるかに、その授業の「個性」が加わっていくのだと感じた。
〔福岡県・匿名希望〕

教師川柳

放課後の学ぶ姿に春祈る

長野県長野西高校・一徹



『VIEW21』臨時増刊号Vol.2
発刊のお知らせ

次号2月号に同封してお届けします

*左はVol.1です

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ

『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ

独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。注目の最新調査も随時アップ中!

「学校外教育活動に関する調査」「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」

キーワードや学校名での検索も可能!

また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

アクセスは →→→ <http://benesse.jp/berd/>

編集後記

「教えること」と「教わること」。教室では、この二つを通した学びが常に営まれています。しかし、「教えたこと」と「教わりたいこと」は必ずしも一致しません。二つの思いを高いレベルで一つにするには、相手の立場にたち、相手の思いを想像する力が必要です。「授業は教師と生徒との相互作用によって質が高まっていくのです」。先生が何げなく言ったこの言葉の中に、本質があるのではないかと思います。(小泉)

VIEW21 12月号 Vol.5

2010年11月26日発行

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 大日本印刷(株)
編集協力 (有)ベンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、山口慎治
撮影協力 川上一生、ヤマギチイキ、松原 誠
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010

VIEW21

2011
February
2月
Volume 6

次号は
2011年2月25日
発行(予定)

〔VIEW21〕高校版は年6回の発行